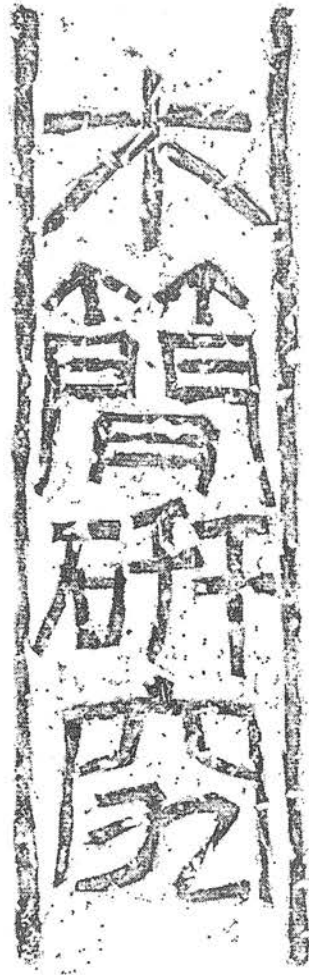


木簡研究

第九号

木簡研究

第九号



木
簡
学
会

題字
藤枝
晃刻

目次

巻頭言……………田中稔……………i

一九八六年出土の木簡……………1

概要
凡例……………綾村宏……………1

奈良・平城宮・京跡……………寺崎保広……………8

奈良・興福寺旧境内……………中井一夫・和田萃……………18

奈良・藤原京跡……………加藤優……………21

奈良・和田麿寺……………加藤優……………26

奈良・橘寺……………加藤優……………27

奈良・曲川遺跡……………阪口俊幸……………29

京都・長岡京跡(1)……………清水みき・国下多美樹……………

渡辺博・山中章……………

松崎俊郎……………

京都・長岡京跡(2)……………辻本和美……………38

京都・長岡京跡(3)……………鈴木広司……………39

京都・長岡京跡(4)……………岩崎誠……………41

京都・平安京右京三条二坊八町……………木下保明……………42

京都・平安京右京五条一坊三町……………久世康博……………43

京都・平安京右京八条二坊六町……………久世康博……………44

京都・平安京右京八条二坊十二町……………久世康博……………45

京都・伏見城跡……………平田泰……………47

大阪・大坂城跡……………中尾芳治……………49

大阪・安堂遺跡……………桑野一幸……………54

大阪・津田トッパナ遺跡……………宇治田和生……………58

大阪・萱振A遺跡……………原田昌則……………59

兵庫・弥布ヶ森遺跡	加賀見省一	80	岩手・胆沢城跡	佐久間賢	87
兵庫・但馬国府推定地	吉識雅仁・甲斐昭光	61	青森・根城跡	佐々木浩一	89
兵庫・初田館跡	岡崎正雄	64	山形・生石2遺跡	安部実	90
兵庫・福田片岡遺跡	岡崎正雄	66	山形・新青渡遺跡	安部実	91
愛知・清洲城下町遺跡(1)	梅本博志	67	秋田・払田柵跡	船木義勝	92
愛知・清洲城下町遺跡(2)	高橋信明	69	福井・田名遺跡	田辺常博	94
静岡・居倉遺跡	澁谷昌彦	71	福井・曾万布遺跡	中司照世	95
静岡・土橋遺跡	永井義博	74	富山・辻遺跡	北川美佐子	96
静岡・駿府城三の丸跡	羽二生保	76	島根・富田川河床遺跡	西尾克己	98
東京・東京大学構内遺跡	藤本強・宮崎勝美		広島・草戸千軒町遺跡	下津間康夫	99
	萩尾昌枝	78	山口・周防国府跡	吉瀬勝康	103
千葉・浜野川遺跡	金丸誠	82	徳島・中島田遺跡	福家清司	104
滋賀・神照寺坊遺跡	浜崎悟司	83	福岡・大宰府跡	倉住靖彦	106
滋賀・浄琳寺遺跡	中井寛明	84	福岡・井相田C遺跡	瀧本正志	110
滋賀・光相寺遺跡	徳網克己	85	佐賀・吉野ヶ里遺跡	七田忠昭	113
滋賀・吉地薬師堂遺跡	山田謙吾	86			

一九七七年以前出土の木簡(九).....114

奈良・平城宮跡(第三二次補足調査) 寺崎保広 114

敦煌凌胡際址出土冊書の復原	大庭 脩	130
漆紙文書集成	佐藤宗諄・橋本義則	144
正倉院木簡の用途——原秀三郎氏の所説に接して——	東野 治之	176
岸俊男会長の思い出	平野 邦雄	180

凡 例

一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および積文の記載形式等については編集担当の責任において調整した。

一、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、積文の漢字はおおむね現行常用字体に改めたが、「實」「證」「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は「井」「冫」「季」「躰」等についてのみ使用した。

一、積文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す（単位はミリメートル）。欠損している場合は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

一、積文に加えた符号は次の通りである（六頁第1図参照）。

「」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す。

< 木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。

× 抹消した文字であるが字画のあきらかな場合に限り

原字の左傍に付した。

抹消により判読困難なもの。

欠損文字のうち字数の確認できるもの。

欠損文字のうち字数が推定できるもの。

欠損文字のうち字数の数えられないもの。

前後に文字のつづくことが推定されるが、折損等により文字が失われているもの。

異筆、追筆。

合点。

木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

校訂に関する注で、原則として積文の右傍に付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

編者が加えた注で疑問の残るもの。

文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

同一木簡と推定されるが折損等により直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかった場合、行末・行初につけたもの。

図版に写真の掲載されているもの。

一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し図名を（ ）内に示した。地図中の▼は木簡の出土地点を示す。

一、積文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、

つぎの一五型式からなる（七頁第2図参照）。

011型式 短冊型。

015型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 小形矩形のもの。

022型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

065型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式 削屑。

広島・草戸千軒町遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒

町遺跡調査研究所『草戸千軒—木簡—』を参照されたい。なおその他の中世木簡については以上の型式番号に適合しないものが多いので、注記を省略したものもある。

位下財掠人安万呂
行夜使仍注状故移

×位下財掠人安万呂
×行夜使仍注状故移

泉進上材十二条中 又八条

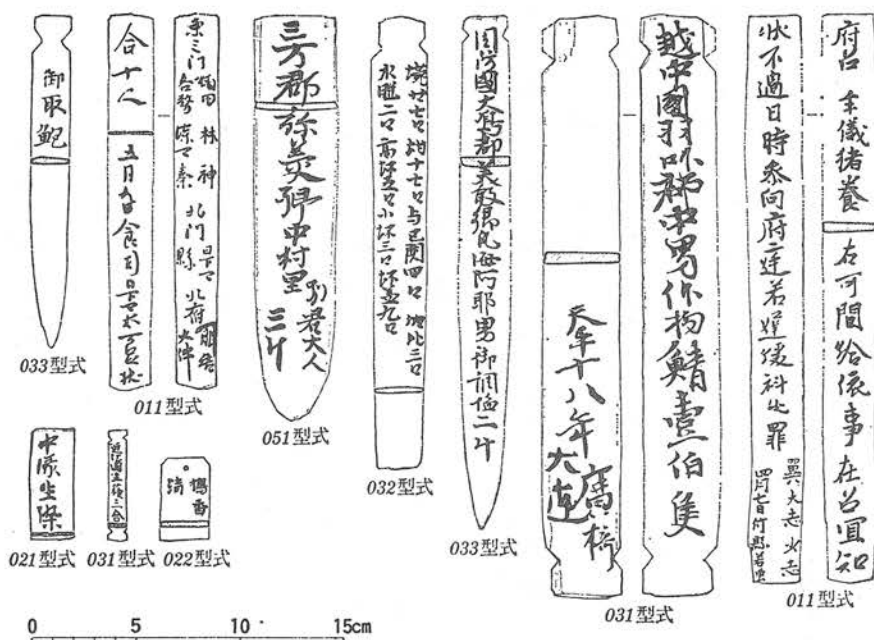
武蔵国男衾郡余戸里大誓鼓一斗天平十八年十一月

請飯 番長二人 舍人十七人
史生一人 右依例所請如件

請飯 番長二人 舍人十七人
史生一人 右依例所請如件

請飯 番長二人 舍人十七人
史生一人 右依例所請如件

第1図 木簡積文の表記法



第2図 木簡の形態分類

奈良・平城宮・京跡

1 所在地 奈良市佐紀町・北新町・三条大路一丁目・二条大路南一丁目、大和郡山市九条町

2 調査期間 平城宮内裏東方東大溝地区 一九八六年(昭61)三月～十一月、同佐紀池南辺地区 一九八六年一月、左京三条一坊一・八坪 一九八七年一月～二月、左京三条二坊三・四坪 一九八六年七月、左京三条二坊七坪 一九八六年九月～一九八七年四月、右京八条一坊十四坪 一九八六年十一月～二月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 町田 章

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡・都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一 内裏東方東大溝地区(第一七二次調査)

調査区は、内裏東外郭とその東方にある埴積基壇建物群からなる官衙(内裏東方官衙)とに挟まれた東大溝SD二七〇〇を中心とする地区である。検出した主な遺構は、掘立柱建物二二棟、門一棟、築

地塀二条、掘立柱塀二七条、溝一〇条などである。木簡は、東大溝SD二七〇〇、内裏東方官衙内から東大溝に注ぐ五条の暗渠、東西溝SD二三五〇とその南北にある溝状の堆積、掘立柱南北塀SA一二九〇七の柱穴から出土した。

SD二七〇〇は平城宮東半部を南流する基幹排水路である。これまで、第一二九・一三九・二一・一五四次の各調査(北から順に)で検出しており、今回は二次と一五四次の間で約一二〇mにわたって調査を行った。二次調査区以北では、兩岸を玉石で護岸した石組溝であったが、今回の調査区では一五四次調査区と同様に、石組は東岸のみで西岸は素掘りのままであった。また何度かの改修が行われたとの知見もえられた。SD二七〇〇の堆積層は大きく六層に分けられ、木簡はすべての層から計四三九六点(うち削屑二七七六点)が出土した。最下層から養老七々神亀元年、底から二層目から天平～天平宝字年間、三・四層目からは天平勝宝～天平宝字年間の紀年銘木簡がそれぞれ出土した。また伴出した土器や軒瓦も概ね層序に従い平城宮出土遺物の編年に矛盾せず、SD二七〇〇は奈良時代を通じて順次埋没していったと考えられる。SD二七〇〇からは、木簡以外にも多量の遺物が出土した。木製品では、人形等の祭祀具、独楽・木球などの遊戯具、物差、蒔絵の八角棒状品、黒漆塗の把頭等、金属製品では、皇朝銭、銅製人形、海老錠、帯金具等、土器では、人面墨書土器やミニチュア土器等、瓦埴類では緑釉埴等が注目され

る。文字資料としては木簡以外に、「造宮内」「宮内省」「内舍人所」^{〔大カ〕}「舍人寮」「女官所」「大炊」「中衛」「衛□」「主典□」「序」「上番」「下番」「考」「考番」「槐皮膏」「神人」などの墨書のある土器、「足」「修」の刻印や「東」と筧書きのある瓦、「献軍器□」と墨書する埴などがある。

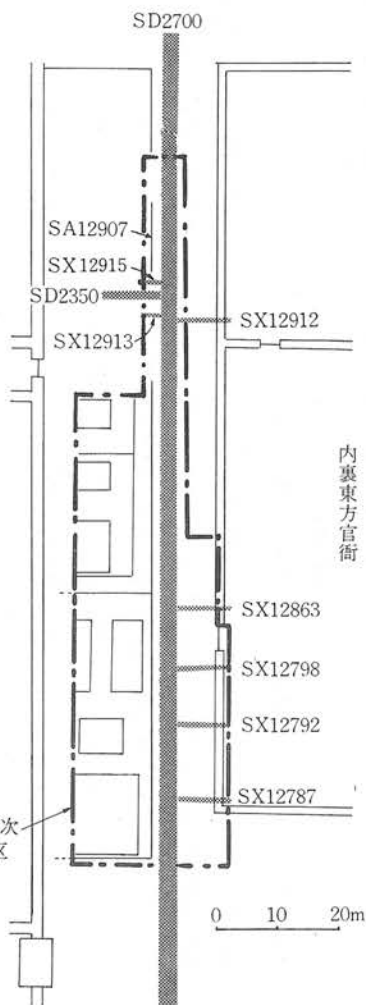
SX 一二七八七・一二七九二・一二七九八・一二八六三・一二九一二は内裏東方官衙内から東大溝に注ぐ暗渠で、全部で木簡

一三六六(うち削屑二二点)が出土した。SX 一二七八七・一二七九二・一二七九八には木樋が残り、またSX 一二七八七・一二七九二・一二八六三には改修の痕跡がある。

SD 二三五〇は内裏内郭内の井戸SE七九〇〇から東大溝に注ぐ素掘りの東西溝で、二度の改修を受けている。木簡は三三二点(うち削屑二点)が出土した。

SX 一二九一三・一二九一五は東大溝の西壁で検出した溝状の堆積で、木簡一〇点(うち削屑一点)が出土した。いずれも東大溝に注ぐ東西溝の流出口の可能性があるが、詳細は不明である。

SA 一二九〇七は東大溝の西岸沿いにある南北塀で、四間分を確認した。その柱穴から木簡二点が出土した。



内裏東外郭東大溝地区略図

二 佐紀池南辺地区(第一七七次調査)

本調査は平城宮西北辺にある佐紀池の南で実施された。検出した奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物一棟、溝四条で、二次に及ぶ整地などの関係から四期に区分できる。木簡は、第一次整地土下の木屑・炭層と東西溝SD 一二九六五から出土した。

第一次整地土下の木屑・炭層からは木簡二七六六(うち削屑七〇点)が出土したが、同じ層から和銅・養老六年の紀年銘木簡とともに、平城宮土器Ⅱ(靈龜・天平初年頃)の土器、平城宮出土軒瓦編年第一期(和銅・養老頃)の軒丸瓦・軒平瓦が出土し、これを覆う第一次整地土からは平城宮土器Ⅱの土器、軒瓦編年第二期(養老年間・天平一七年頃)の軒瓦が出土した。

SD一二九六五は調査区のほぼ中央で検出した素掘りの東西溝で、幅約二・六m、深さ約〇・五mを測る。この溝は第二次整地土の上から掘られている。木簡は三点が出土し、ほかに平城宮土器V(宝亀延暦初年頃)の土器、軒瓦編年第Ⅲ期(天平一七年(天平宝字頃)の軒瓦が出土しており、奈良時代末期まで存続したことがわかる。

三 左京三条一坊一・八坪(第一八〇次調査)

本調査は平城宮朱雀門跡の南東で実施された。検出した主な遺構は二条大路南側溝SD四〇〇六と朱雀大路東側溝SD九九二〇である。木簡は二条大路南側溝から出土した。

SD四〇〇六は素掘りの東西溝で、幅約三・三m、深さ約〇・四mを測る。溝内の堆積はおおむね上下二層に分かれ、伴出遺物は極めて少ない。木簡は上層から二点が出土した。

四 左京三条二坊三・四坪(第一七四一〇次調査)

調査区は四坪の西北部にあたる。奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物七棟、掘立柱塀七条、井戸一基、三・四坪の坪境小路とその南北両側溝等で、A、Dの四期に区分できる。木簡はB期の井戸SE三九三〇の埋土から一点が出土した。この井戸は井戸枠が抜き取られていて、埋土からは奈良時代中頃から後半にかけての遺物が伴出している。

五 左京三条二坊七坪(第一七八次調査)

調査区は七坪の南半分を占め、特別史跡宮跡庭園の北に接する。

奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物五〇棟以上、掘立柱塀三九条以上、溝一〇条以上、井戸一四基、坪境道路一条、坊間路一条、坪内道路二条、旧河川数条などであり、それらは七期に区分できる。木簡は溝SD一四、掘立柱建物SB五五の柱抜き穴、及び東二坊坊間路の西側溝SD一〇六から出土した。

SD一四は古墳時代より存続していた菰川水系の流路を奈良時代初期に幅を狭く造成し、中期に廃絶した、幅三・七m、深さ〇・四五mの蛇行する溝である。木簡はこの最上層から一点が出土した。SB五五は、南北に廂をもつ五間×二間の東西棟で、この東南隅の柱抜き穴から木簡一点が出土した。SB五五は奈良時代中期に属する。SD一〇六は奈良時代を通じて機能していた南北溝で、幅三m、深さ一・二mある。堆積土は三層に分かれるが、木簡はその下層から合計一二点(うち削屑八点)が出土した。

六 右京八条一坊十四坪(第一七九次調査)

調査区は十四坪のほぼ中心部にあたる。奈良時代の主な遺構として掘立柱建物二四棟、掘立柱塀五条、溝四条、井戸三基等を検出した。遺構は大別してA・B二時期に区分できる。木簡はB期の井戸SE一八八〇の埋土から一点が出土した。この井戸の埋土からは平城宮と同範の軒平瓦が伴出している。なおこの井戸は金属製品の製作に使用されたと推定されている。

8 木簡の釈文・内容

一 内裏東方東大溝地区
東大溝SD二七〇〇

- (1) ・×申請暇日事
 ・×□□□□ (78)×(16)×1 081
- (2) ・□人主 □□麻呂
 廣_[浜カ]□□□_[魚カ] 右二人召継 右二人侍従所
 □□□□ (197)×43×4 011
- (3) ・「召勝烈斯」_(額田部諸羽、公嵯城五月尾塞古万呂)
 ・「八歳十月七日宇治」 260×(28)×7 081 *
- (4) ・「牒上 男繩御所」
 □物部廣公相替請丈部国勝
 ・「右人上官好申而令下甘櫿」
 殿 九月二日□国中□成」 139×32×4 011 *
- (5) ・「右依下毛野金仙不食期自今日迄」
 二日并三箇日御食不奉□□□□」 149×(20)×4 051
- (6) 「僧房所」
 □□□□_[穿孔] 中房預紀福足食。_(穿孔)
 □□□□ 食一升五合 三月十三日别当佐伯千□□」 176×51×5 011
- (7) ・御垣本所編十二枚之□□料□
 □□ 九月□三日中衛□□□□ (255)×(18)×3 081
- (8) ・_(穿孔)「造東院所 請藁參□」
 ・_(穿孔)「嶋万侶行」 (196)×35×5 019
- (9) ・「造五丈殿所請合釘四隻各長七寸右為宇相下桁固」
 料請如件」
 ・「九月九日領紀廣穂」
 □□□□_[穿孔] 威馬」 362×38×4 011

- (10) 造宮省 合漆 万呂
 「天平宝字三年卿從三位藤原」
 $401 \times (40) \times 5 \quad 081$
- (11) 御贄納三斗 天平宝字六年十二月× (96) × 15 × 3 081
- (12) 紙二百五十七張選文二百五張
 091
- (13) ×百卅八勝宝五年^{〔十九〕}日二百十三夜二百十一」
 $(175) \times 15 \times 2 \quad 019$
- (14) ×日大上天皇」
 $(166) \times 19 \times 3 \quad 019$
- (15) 「録主水司大膳
 北陸道 」
 $170 \times (65) \times 8 \quad 081$
- (16) ^{〔穿孔〕}造兵司矢作表万呂」
 $104 \times 15 \times 3 \quad 011 \quad *$
- (17) 「内隔南方西門籍
 $(175) \times (17) \times 6 \quad 081 \quad *$
- (18) 「北西門 他田宮成 丈部敷 錦×
 「合四人 $(149) \times 16 \times 4 \quad 019$
- (19) 縣犬甘門

 $(82) \times (30) \times 3 \quad 081$
- (20) 西門川村 大石船守麻呂 給×
 秦廣安
 $(223) \times 31 \times 3 \quad 081$
- (21) 「口宣
 (題籤軸)
 $(52) \times (19) \times 5 \quad 061$
- (22) 「宿直
 (題籤軸)
 $(96) \times 29 \times 6 \quad 061$
- (23) 「尾張国智多郡富具郷和尔部臣人足
 「調塩三斗天平勝宝七歳九月十七日
 $(198) \times 28 \times 3 \quad 033$
- (24) 「若狭国三方郡葦田駅子
 三家人国御調塩三斗
 「^{〔穿一孔〕}米箱』
 $152 \times 33 \times 5 \quad 011$
- (25) 「丹波国何鹿郡拜師郷柏五戸秦×
 「丹後国与社郡日置郷庸米六斗」
 宇良媛部身万呂」
 $(189) \times 20 \times 9 \quad 039$
 $283 \times 22 \times 4 \quad 031 \quad *$

- (27) 〔駿河国駿河郡子松郷津守部宮麻呂役籠堅魚拾一斤拾兩 天平宝字二年□国司目從六位下息長真人大國
郡司少領正六位下金刺舎人足人〕 338×26×4 032
- (28) 〔安房国長狭郡置津郷戸主文部黒秦戸口文部第輸凡鯁陸斤 専当国司目正八位下箭口朝臣大足
郡司少領外正八位上丈部□郡敷天平□□ 〕 (496)×18×5 051
- (29) 〔阿波国那賀郡武芸馱子戸主生部東方戸同部毛人調堅魚六斤天平七年十月〕 287×22×6 031
- (30) 〔上総国平群郡狹隈郷□丁若麻績部麻呂養錢六百文〕 77×18×4 032
- (31) 〔参河国芳岡郡比莫鳴海部供奉九月料御贄佐米六斤〕 202×23×3 031 *
- (32) 〔参河国芳岡郡海部供奉九月料□□×(219)×23×4 039 〕 (37) 〔梅十一〕 81×24×2 032 *
- (33) 〔出雲国意宇郡飯梨郷中男作物海藻三斤 籠重漆兩 天平勝宝七歲十月 〕 (38) 〔大麥〕 72×18×6 032 *
(39) 〔附子〕 28×10×3 021
- (34) 〔御野郡出石郷白米五斗 〕 (40) 〔石斛壹拾斤〕 99×22×4 031
- (35) 〔天平勝宝八歲米五保倭文部東人〕 161×24×7 033 *
(41) 〔上部字甘〕 117×21×3 032 *
〔備中国乾白魚陸斤〕 133×29×7 031 *
東西溝SD三三五〇
- (36) 〔合カ〕請請謹解謹解申事解□奈尔波津尔〕 (42) 〔播磨国賀茂郡下賀□□□□〕 221×21×6 033
〔佐久夜己乃波奈□□□□布カ〕 535×(38)×4 081
〔民直豊国庸米一俵〕 221×21×6 033

(43) 〱周防国佐波郡牟礼郷上村里戸辛人麻□□□二枚神亀三年十月〱

(234) × 24 × 3 031

溝状堆積 SX 二一九二三

(44) 〱阿波国那賀郡薩麻駅子戸鵜甘部□麻呂戸同部牛調堅魚六斤□平七×〱

261 × 24 × 5 031

(45) 〱因幡国巨濃郡潮井郷河会里物部黒麻呂中男作物海藻六斤 天平七年七月〱

369 × 28 × 3 031 *

(6)の紀福足は延暦二年六月一日の「東大寺解」〔平安遺文〕八一四二八九に正六位上行中監物として名前がみえる人物にあたる。この木簡はSD二七〇〇の最上層からの出土であり、年代的にも矛盾しない。(8)~(10)は造営関係の木簡である。この他にも造営関係木簡が数点出土しており、(10)の天平宝字三年の年紀をもつ木簡と同一の層に集中する。天平宝字年間は『続日本紀』によれば、宮の改作が行われた時期であり、今回の一連の木簡もこれと関わる可能性が高い。また、天平宝字三年の時点の造宮卿の名前はこれまで知られていなかったが、(10)の木簡によって、従三位の藤原氏であるから、藤原永手であることがわかる。(11)~(12)は門に関係する木簡である。今回の調査では、東大瀨の西の内裏東外郭にあたる場所での多くの建物や塀を検出したが、これらの遺構が門の守衛に関わるものと考えられることもできよう。貢進荷札では(3)の木簡が注目される。これまで参河国幡豆(芳図)郡の贄貢進荷札は折嶋と篠嶋の二カ所の例のみ知られていたが、二つの島に挟まれた日間賀島(比莫嶋)からも

贄が貢進されていたことが判明した。比莫嶋の贄の荷札は次の佐紀池南辺地区からも出土している(後掲)。(11)・(12)は専当官の記載がある荷札である。以前の出土例と合わせて、専当官の荷札は四点となった。(24)・(20)には駅子の名前が記されているが、いずれもはじめて知られた駅名である。

二 佐紀池南辺地区

木屑・炭層

- (1) 〱伯耆国相見郡巨勢郷雜腊一斗五升養老□年十月〱
197 × 14 × 3 031
- (2) 〱若狭国遠敷郡遠敷里□果□□〱
調塩一斗 □□〱
〱和銅四年四月十× 〱
169 × 34 × 5 031
- (3) 〱讚岐国香川郡細郷生壬得万白米五斗〱
183 × 23 × 5 031 *
- (4) 〱丹比門十二月番下□
〱麻呂
116) × 24 × 2 019

- (5) 河
 丈部若麻呂 丈部若麻呂
 天剛々々 天剛々々
 熱□
 丈部若麻呂 丈部若麻呂
 天剛々々 天剛々々
 長□
 ・「急々如々律々令々」 (右側面)
 ・「急々如々律々令々」 (左側面) 120×76×18 011 *
 (6) 「∨」大林薦「∨」 125×23×3 031 *
 (7) 「∨」供 御^{〔耳カ〕}系十約」 112×21×5 032 *
 (8) □染司在釜一口^{深一尺八寸}
 □^反□^{膳職}者未□
 □部造得末呂□作□□^{膳職}者未□
 □□足三在入六斗釜二口受 (121)×(35)×7 081
 (9) 「∨」參河国芳豆郡比莫嶋海部供奉四月料大贄[〓]
 〓黒鯛六□〓 202×18×3 032 *

- (10) 「∨」美濃国麦門冬五升 (141)×23×3 039 *
 (11) 「∨」主水司布一端六尺 140×20×3 032 *
 (12) ・「∨」南方帳十二□
 ・「∨」副 136×23×6 032
 (5)は特異な記載を持つ呪符木簡である。出土した層から考えて、奈良時代の前半に遡ることになり、呪符木簡としては藤原宮跡第四次出土のもの(本誌掲載)とともに最古の部類に属する。
 東西溝SD二二九六五
 (13) 「∨」讚岐国香川郡細郷秦公□ (103)×21×5 039
 (14) ・「□」^{〔官カ〕}左弁^{長五丈}
 今五^{廣二丈}
 ・「丈部伯麻呂 伯麻× (106)×27×3 019
 四 左京三条二坊三・四坪
 井戸SE三九三〇
 (1) 「∨」小□郷弟国□ (97)×26×6 039

五 左京三条一坊七坪

溝SD一四

(1) ・「尾張国海部郡嶋里」

・「^{〔末カ〕}連□□□□□□」

159×28×8 011

坊間路西側溝SD一〇六

(2) □□□ 并□□人等上日帳」

356×50×9 061

(3) 正宮四人 内蔵一人

(156)×16×2 011

(4) 播磨国神前郡陰山郷□×

(162)×(18)×4 081

(5) 〱厨布直銭二貫

(123)×21×3 039

(6) ×年二月料御贄字波加六斤」

(120)×18×6 019

(2)は木箱の蓋に墨書したもの。(3)は上・下端が二次的に削られている。

六 右京八条一坊十四坪

井戸SE一八八〇

(1) 「秦五 米一斗十一月十七日□」

164×25×5 051

9 関係文献

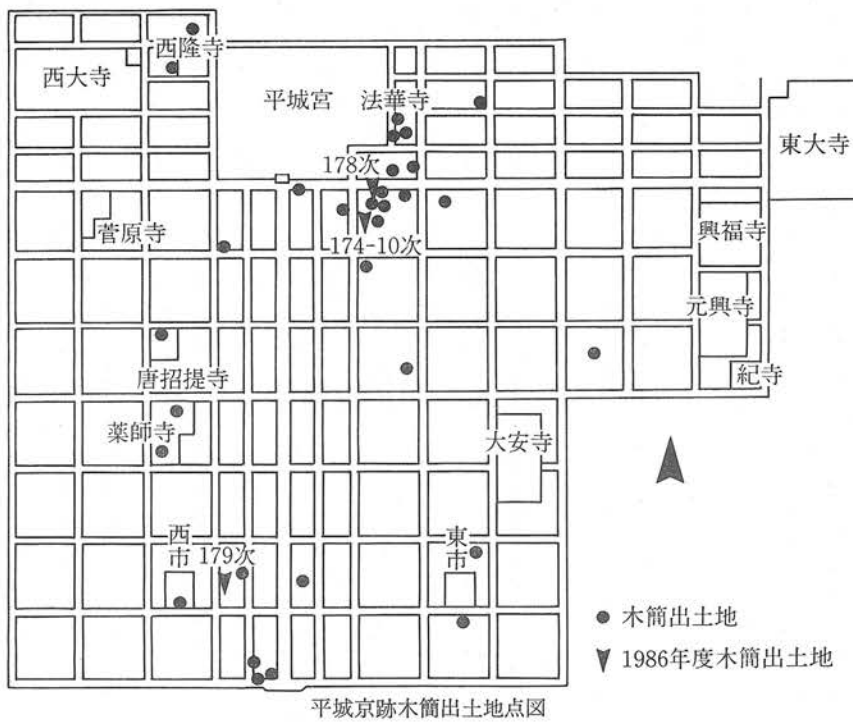
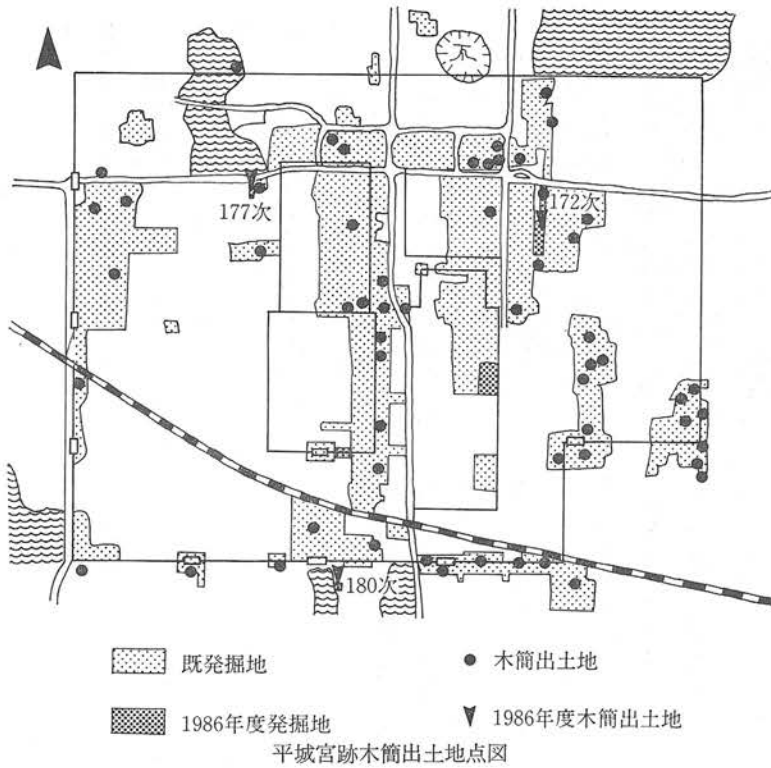
奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九八七』(一九八七年)

同『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九八七年)

同『平城宮発掘調査出土木簡概報(五)』(一九八七年)

(寺崎保広)

1986年出土の木簡



奈良・藤原京跡

- 1 所在地 奈良県橿原市木之本町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)二月～一九八六年八月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 岡田英男
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙・都城跡
- 6 遺跡の年代 七世紀末～八世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

香久山の西麓において一九八五年の第四五・四六次調査に続いて第四七・五〇次(西)調査を行った。第四五・四六次調査地を合わせた総面積は二〇〇〇㎡で、ほぼ藤原京左京六条三坊の東北坪と東南坪に当たる。このうち第四七・五〇次(西)調査地は六条三坊の中心部および東北坪西南部に当たる。両調査地は東西に接しており、面積は合わせて四〇〇〇㎡である。

第四五次から第五〇次までの調査の所見を簡略に述べると、遺構は古墳時代から室町時代までであり、そのうち藤原宮期はA・B二期に大別できる。

A期は道路と区画の塀を中心とした時期で、東三坊坊間路、六条条間路、坪の周囲を限る塀、坪を東西あるいは南北に二分する塀な

どである。坊間路は八二m、条間路は六〇m分を検出したが、条間路は想定位置より約一四m北にある。両路は調査地西端で交差する。建物は、東南坪に小規模建物二棟、東北坪に三棟ある。この三棟の建物は柱筋を揃える関係にあるが、その性格は今のところ不明である。坊間路の北には東西大溝SD四一三〇があり、奈良時代にも存続する。調査地東端の香久山に近接する付近には幅一九m以上、深さ一・二mの南北大溝SD四一四三があり、東三坊大路想定位置に当たるが、大規模であることから藤原京の東堀河である可能性がある。先の東西大溝SD四一三〇はこのSD四一四三に接続する。

B期は道路や区画の塀が大きく改められ、大規模な建物が整然と配されて坊内の利用状況が一変する時期である。まず条間路・坊間路や、東南坪を南北に分ける塀は廃され、東北坪・東南坪とも坪内を東西に二分する南北塀より西が一体のものとして利用され、東半部は空閑地となっていたようである。

建物は、坊間路・条間路が交差していた位置のやや南で、坊の中心に当たるところに七間×三間の身舎に土庇のついた東西棟建物SB五〇〇〇があり、これを中心に八棟の東西棟建物や南北棟建物が整然と並ぶ。SB五〇〇〇はこの建物の群の正殿とみられ、前殿や脇殿に相当するとみられる建物もある。

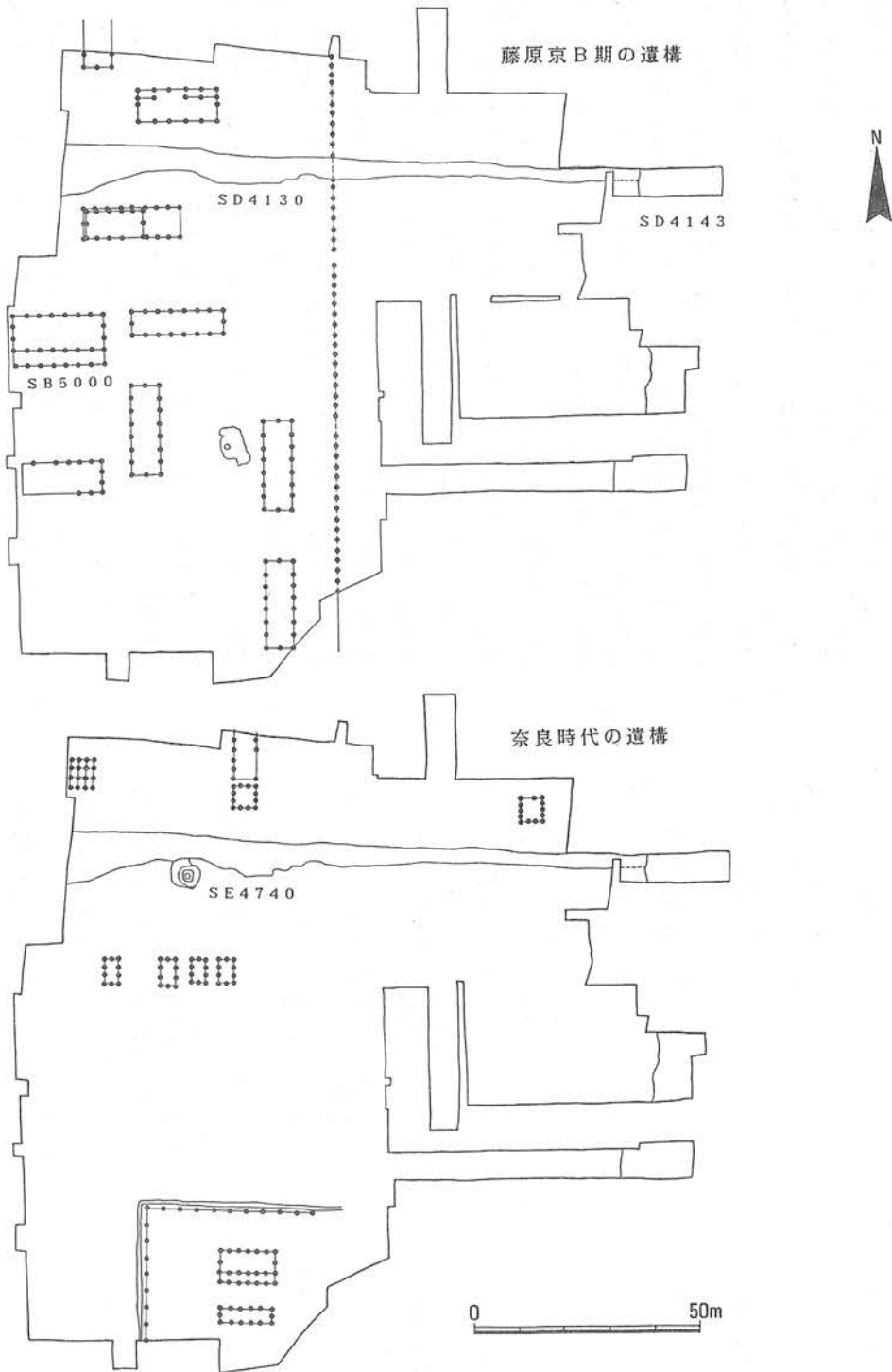
これらの建物群は正殿が坊の中心部にくるので、一坊全体の占地に基づく配置と考えられるが、一坊の占地は藤原京では初めての検

出例である。その性格については宮殿邸宅とも、官衙とも考えられるが明確でない。

次に奈良時代になると、大規模な区画施設や整然とした建物群はみられなくなるが、なお建物一〇棟が検出されており、引続き重要地域として機能していたようである。

調査地南半では塀と溝による方形区画内に南北に並ぶ二棟の東西棟建物を配置しており、北半では総柱の倉庫風建物や、東西に並ぶ小建物がある。また藤原京A期以来の東西溝SD四一三〇がこの時代にも存続しており、その第四七・五〇次(西)調査地内で木簡・墨書土器が出土した。また第四七次調査地には大溝の南岸に接して井戸SE四七四〇があり、呪符・墨書土器が出土した。

東西大溝SD四一三〇は坊の想定心から三六m北の位置にあり、総長一二〇m分を検出した。東方では幅四・五m、深さ一・五mであるが、西に向かって次第に深くなり、調査地西端では幅一一m、深さ一・八mを測る。東端は南北大溝に接続するが、溝底のレベルからみて西流していたのであろう。北岸は比較的直線的で、当初の姿をとどめているとみられるが、南岸には大きくえぐられた部分がある。堆積土は下から茶褐色砂礫・青灰色粘質土・灰褐色粘質土および淡い褐色粘質土に分けられる。茶褐色砂礫層は溝底にわずかに残存し、七世紀の遺物を含み、この溝の開削が藤原宮期までさかのぼることを示している。青灰色粘質土は奈良時代の層で、何度も流



第47・50次（西）遺構略図

路を変えながら流れた様子がうかがえるが、しだいに滯水するようになり、平安時代になって埋め立てられた。

この溝からは多数の遺物が出土しているが、藤原宮期のものは少なく、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多い。主な遺物としては、木簡二五点、墨書のある斎串一点、「香山」の墨書土器三点など墨書土器六一点、陶硯・緑釉獸脚硯・風字硯・黒色土器、土馬・製塩土器・ミニチュア土器、鞆羽口、バルメット押捺文軒丸瓦、人形・斎串・刀子形・馬形、木針、櫛、琴柱、鉄釘、和同開珎が出土した。木簡と墨書のある斎串は東西大溝のうち、南岸に接する井戸付近から西の奈良時代の層から出土した。靈龜三年の年紀のあるものがあり、他の木簡も奈良時代前半のものともみてよいであろう。

東西大溝SD四一三〇の南岸に接する井戸SE四七四〇は、方形横板組で、内法一辺〇・九mあり、横板は平均一二枚ほど残り、高さ三・〇m内外である。掘形は上端が径約六mの不整形で、底部は一辺一・七m内外の方形となる。深さは三・六mある。井戸枠内からは呪符一点の他、「香山」の墨書土器一〇点など墨書土器三一点、土師器・須恵器・黒色土器、瓦、鎌・環状鉄製品・鉄釘・小環付金銅製細棒、無文銀銭・和同開珎等が出土した。土器は最下層から飛鳥VI〜平城宮III段階、下層から平城宮III段階、中層から平城宮VI段階、上層からは九世紀〜一〇世紀初頭のものが出土した。呪符は最下層から、墨書土器の大部分は下層からの出土である。

8 木簡の积文・内容

井戸SE四七四〇

- (1) 「不殺 (符籙)未方女者」
(上面ニ墨線アリ)
150×15×5 061

東西大溝SD四一三〇

- (2) 「收靈龜三年稻養×
(118)×(20)×4 081
- (3) ・「菜採司謹白奴嶋逃」
〔行カ〕
・「別申病女如」
〔前カ〕
・「遣カ」
203×29×3.5 011
- (4) 「斤得三束二束」
〔遣カ〕
(302)×18×4 019
- (5) 百廿七束一
〔把カ〕
091
- (6) ・「四月日」
〔三カ〕
・「代斗…」
(51+26)×32×2 019
- (7) 「斗四升」
97×(17)×3 081
- (8) 「小豆」
(84)×29×4 019
- (9) 「夫等」
〔人カ〕
(41)×(18)×1 081

(10) 「近江国蒲」

・「宿□戸」

(95) × 22 × 4 039

(11) 「六斗」

135 × 22 × 5 032

(12) 「左京職」(齋串)

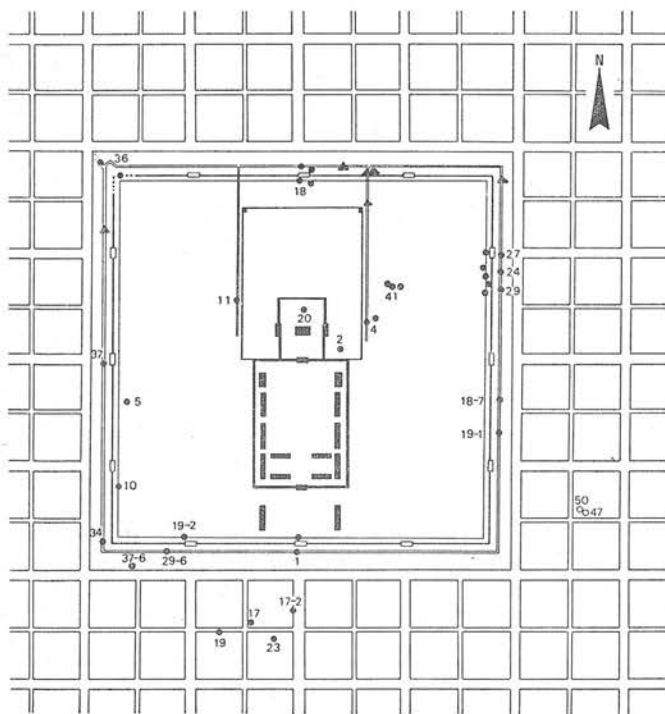
163 × 23 × 6 061

(2)の木簡は官司あるいは庄所などでの稲の収納を示しているが、貢進物荷札や「菜採司」と記した木簡があるので官司の可能性があらう。天平二年の『大倭国正税帳』によれば養老四年と七年に「香山正倉」の存在が知られるが、この木簡と関係があらうか。多量の「香山」の墨書土器が出ているように、カグヤマを「香山」と書く例は多い。(12)は齋串で、左京職は平城京のものであらう。そうすると、平城左京職とこの場所との関係が問題となる。平安京の例では左京職の官司神として左京二条に久慈真智命神が祀られており、『延喜式』(神名上)ではこの神について「本社 坐大和国十市郡天香山坐櫛真命神」とあるので、天香山に鎮座の神を分祀したものであることが知られる。あるいは手掛かりとなるであらうか。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(Ⅱ)』(一九八七年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一七』(一九八七年)(加藤 優)



藤原宮木簡出土地点略図

奈良・和田麿寺

1 所在地 奈良県橿原市和田町

2 調査期間 一九八六年(昭61)一〇月～一二月

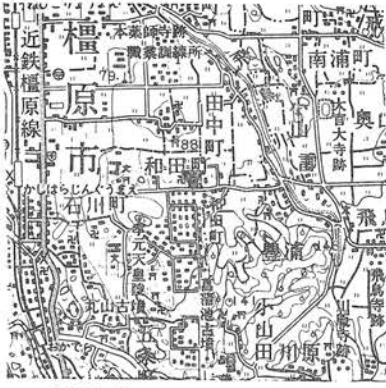
3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

4 調査担当者 岡田英男

5 遺跡の種類 寺院・都城跡

6 遺跡の年代 弥生時代～一三世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(吉野山)

本調査は和田麿寺第三次調査として行ったもので、場所は「山田道」の後身かと推定される県道橿原神宮東口停車場線の北側に接する水田で、第二次調査で検出した塔跡(大野塚)の東南約一二〇mに当たると見られる。調査地は南北二地区に分かれ、面積は二四五㎡である。北区は全体が東南から西北への流路内で、弥生時代から中世までの遺物が混在している。古墳時代の

土器や中世の土器類は多量に出土したが、藤原宮期、奈良時代のものはない。他に、るつぼ・輔羽口・鉦滓など鑄造関係の遺物、滑石製の孔円盤一点、延喜通宝一点、木簡二点が出土した。

南区では東西九mにおよぶ計一一個の中世の立石列を検出した。現県道が「山田道」を踏襲しているならば、中世の「山田道」の北路肩の可能性があるが、また西にある薬師堂の前身遺構とも考えられる。

8 木簡の積文・内容

(1)

□	□	□	□	□
□	□	□	□	□
□	□	□	□	□

 (101) × (16) × 5 081

(2)

□	□	□	□	□
□	□	□	□	□
□	□	□	□	□

 (159) × 19 × 3 081

木簡は古代のものとみられるが、中世遺物と共に出土したため、はっきりした時期はわからない。「大八嶋」は日本を指す言葉として宣命等に用いられるが、宣命では「大八洲」と記す例が多い。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(八)』(一九八七年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一七』(一九八七年)

(加藤 優)

奈良・橘 寺



(吉野山)

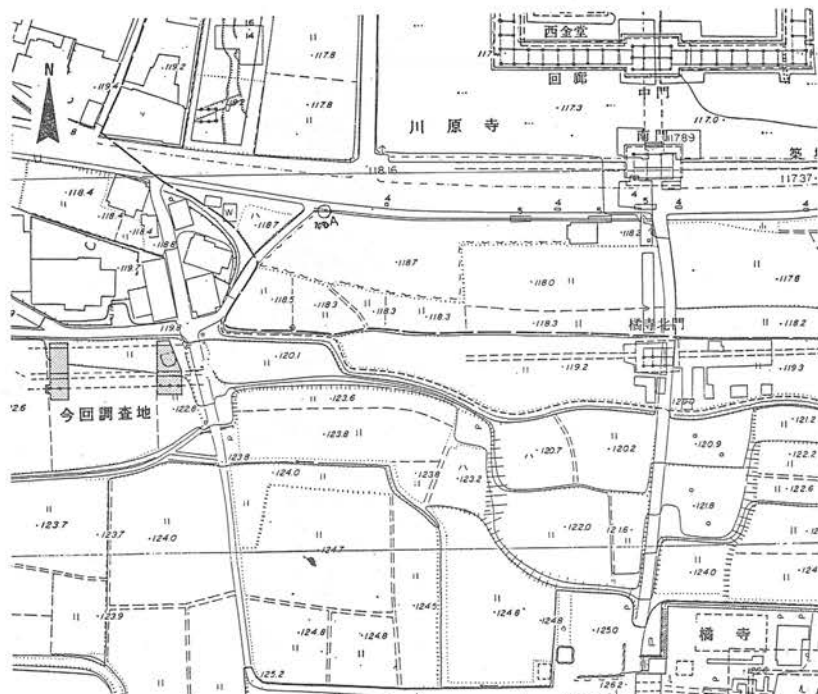
○一とその北雨落溝SD○
二で、SA○一は東区で二
間分、西区で一間分を確認

I期は掘立柱東西塀SA
II期(八世紀中頃)・III期(中
世)に区分できる。

西二カ所に分れ、面積は一
六〇㎡である。遺構は大別
してI期(七世紀後半)・II
期(八世紀中頃)・III期(中
世)に区分できる。

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村橘
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)九月〜十一月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 岡田英男
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 七世紀〜一五世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査地は橘寺の北西約一七〇mの地点で、橘寺とその北に位置する川原寺との旧境界と考えられる里道の南側である。調査区は東



橘寺調査位置図(1:2000)

し、一五間分が復原できる。SD○二は塀心から三m北にある素掘り溝である。II期は土壇SK○五がある。東西四・五m、南北三・

五m、深さ一・五mで、造営工事の廃材や塵芥を投棄したゴミ捨て穴と推定される。この土壇やⅡ期整地層から出土した瓦は川原寺創建瓦を含む七世紀後半のもの、土器は藤原宮期から奈良時代中頃のものである。土壇中から木簡が九点出土した。Ⅲ期はSA〇一から五m北に設けられた築地塀SA〇三とその北雨落溝SD〇四、土壇SK一〇等である。SA〇三は基底部幅三m、残存高約〇・五mで、築地本体は削平されていた。SD〇四は築地の北二mにあり、深さ一・二m、復原幅二mで、鎌倉時代～室町時代初期の土器・瓦が大量に出土した。この築地は以前に確認している橘寺北限の築地塀の西延長部で、今回北門心から一五四m分確認したことになり、西限はさらに西に延びる。築地基底部出土の遺物からみて、前身の築地があったとしても八世紀中頃以前にはさかのぼりえない。それ以前は南の東西塀が北限施設であった可能性が生じてくる。これらの塀や築地は川原寺の伽藍方位に一致し、遺物の上でも同寺と共通するものが多いから、古代においては橘寺の北限域は、川原寺の強い影響下にあったらしい。

8 木簡の积文・内容

(1) ・^{〔香カ〕}川郡□□郷□□□□□□

・^{〔香カ〕}川郡□□郷□□□□□□

158×21×3 032

(2) ×魚煮一連上

(92)×15×2 059

(3) 〔煮凝〕

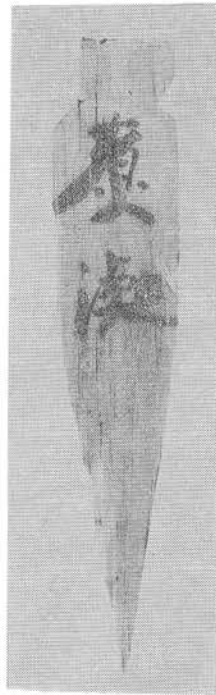
114×23×2 033

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(一)』(一九八七年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一七』(一九八七年)

(加藤 優)



木簡(3)



(京都西南部)

本調査は、倉庫建設に伴う事前調査として実施した。調査地は、長岡京跡右京三條二坊十四町推定地にあり、三條京路小路南側溝の検出が予想された。このため、長岡京跡右京第二三九次(7ANIKC-4地区)調査として行った。

当調査では、長岡京期の掘立柱建物一棟と、三條京路小路南側溝が検出された。この小路側溝は、ほぼ推定位置に検出され、その規模

京都・長岡京跡(4)

- 1 所在地 京都府長岡京市今里北ノ町
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)八月～九月
- 3 発掘機関 財長岡京市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 岩崎 誠
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 八世紀末
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、倉庫建設に伴う事前調査として実施した。調査地は、

長岡京跡右京三條二坊十四町推定地にあり、三條京路小路南側溝の

は、幅一・五m、深さ〇・二mを測る。埋土は、下層の砂層と上層の粘質土層に分かれ、両層から長岡京期の遺物が出土した。木簡二点は、上層から出土したもので、伴出遺物には、土器類、カマコ、齋串等があり、下層からは、和同開珎、墨書土器等が出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「〽日部郷□連赤人五斗」 178×27×9 032

(2) □□□× 150×(13)×7 011

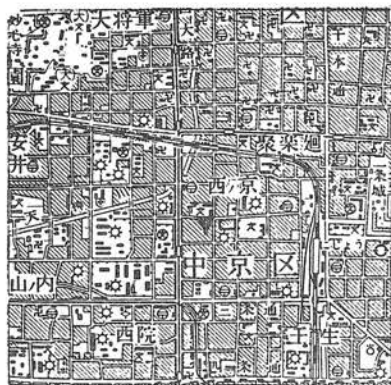
(3) 「〇」(齋串の墨書) 211×32×2 061

(岩崎 誠)



京都・平安京右京三条二坊八町

1. 所在地 京都市中京区西ノ京原町
2. 調査期間 一九八六年(昭61)二月～一九八七年三月
3. 発掘機関 財京都市埋蔵文化財研究所
4. 調査担当者 木下保明・堀内明博
5. 遺跡の種類 都城跡
6. 遺跡の年代 平安時代
7. 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西北部)

調査地は平安京三条二坊八町の東一～三行北四、五門に位置する。検出した遺構は平安時代前期から中期の貴族の宅地の一部とみられる東広庇付きの二間×四間の掘立柱建物とその南に接してつくられた苑池と思われる石組み遺構、井戸、そして西靱負小路の西側溝と一町の真中やや西よりを南北に流れる幅約六mの川跡などがある。

木簡は川跡の堆積土上層

から出土している。堆積土は大きく二層に分かれ、下層は平安時代中期、上層は平安時代後期である。共伴の遺物の中で注目すべきものとして長さ九八cm、太さ二・五cmのへび形の木製品がある。

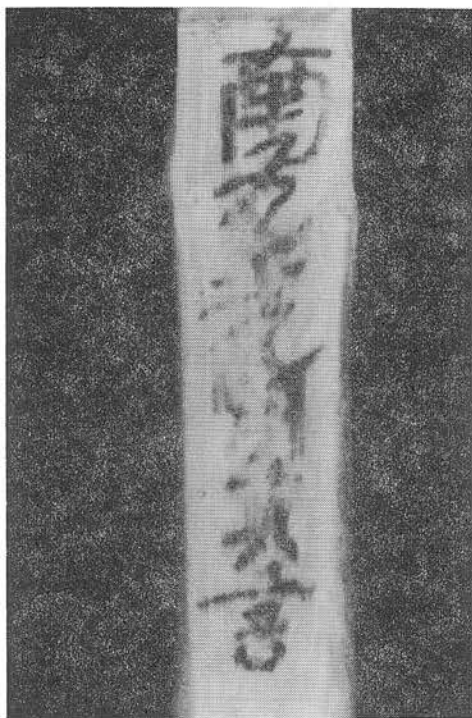
8 木簡の釈文・内容

(1) 「南無光明真言」

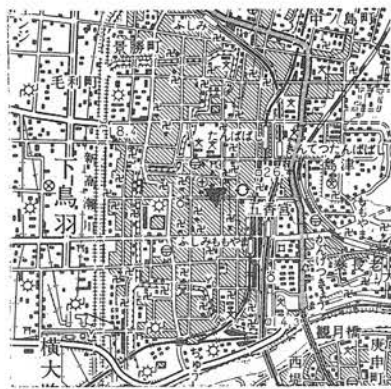
650×50×90 190

杭状木製品の上端約二・五cmから削り出した長さ二五・五cm、幅四・五cmの平端面に墨書。

(木下保明)



京都・伏見城跡



(京都東南部)

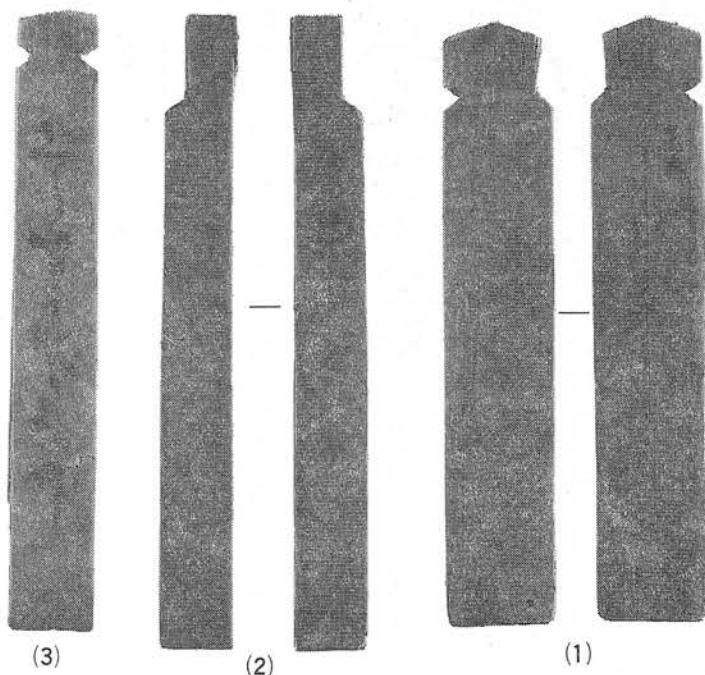
伏見城は文禄三年(一五九二)に築かれた豊臣秀吉による最後の城郭で、京都市南郊の伏見桃山丘陵一帯にその城下町と共に展開していた。地震や戦乱により倒壊や焼亡を繰り返したが、その度毎に再建されたが、元和九年(一六二二)徳川家光將軍宣下後ついに廃城となり、秀吉築城以来三一年間の命脈を閉じる。調査地はこの城下町の一角にあたり、古絵図には仙石左門屋敷地に

- 1 所在地 京都市伏見区今町
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)一〇月～一二月
- 3 発掘機関 財京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 平田 泰
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 平安時代、桃山時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

比定されている地区である。調査では平安時代前期、桃山時代～江戸時代前期、江戸時代中期～後期の遺構・遺物が検出された。桃山時代～江戸前期の遺構では井戸・柱穴・土塋などが検出されているが、木簡類はそのうち東西四m、南北五m、深さ二mの土塋から、土器及び大量の漆器椀や木製品などと共に出土した。

8 木簡の積文・内容

- (1) 真竹おれ竹一そく□
一そく仕候
 - (2) 下地たて竹
× □ ×
 - (3) 上うす竹三本
127×17×3 032
 - (4) 衛門尉様
75×176×3 065
 - (5) 上谷 □ □ 二口 ×
193×(99)×3 065
- 190×(15)×5 032
124×23×2 032
- つ。竹類を扱う江戸時代前期の職人か商人が居住する町家の存在の一端がうかがえる。
(平田 泰)



『平城宮木簡 四』の刊行

平城宮跡出土木簡の正報告書としての第四集が刊行された。対象となるのは昭和四一年に宮の東南隅で実施された第三二次補足調査で出土した木簡である。同調査では宮の南を限る大垣の北を流れる東西溝から一万二千点をこえる大量の木簡が出土した。削屑がその大半を占めるとはいえ、式部省で行われる考課・選叙の関係木簡がまとまって出土している。すでに『平城宮発掘調査出土木簡概報(四)』の中に釈文の一部が略報告されているが、その正報告書にあたる。同調査の一万二千点余の木簡を一冊でまとめることは困難なため、三分冊に分けて刊行することとなり、『平城宮木簡 四』はその第一分冊である。約二千五百点の木簡の写真図版と別冊の「解説」よりなり、「解説」には遺構の概要・考選木簡の分析・釈文等が掲載されている。

奈良国立文化財研究所発行

(コロタイプ 図版一二〇枚 解説A五版・本文四一四
 頁 一九八六年三月刊 頒価二五、〇〇〇円、〒一、五
 〇〇円 解説のみ三、六〇〇円、〒四〇〇円)

奈良市橋本町三六番地 榊明新印刷

『長岡京木簡一』

向日市教育委員会発行

コロタイプ図版 B4版 51枚

解説 A5版三二〇頁

一九八四年刊

頒 価 図録・解説共 一五〇〇〇円

解説のみ 四五〇〇円

送 料 不要

△申込先▽ 真 陽 社

木簡研究 第三号

卷頭言——中国簡牘呼称についての提言——

大庭 脩

一九八〇年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京左京(外京)五条五坊七坪 藤原宮
跡 稗田遺跡——下ッ道—— 長岡京跡 大蔵司遺跡 西沖遺跡
御殿・二之宮遺跡 野路岡田遺跡 多賀城跡 漆町西遺跡 桜
町遺跡 白山橋遺跡 御館遺跡 御着城跡 鶴・城山遺跡 草戸
千軒町遺跡 野田地区遺跡 観世音寺僧房跡 大宰府学校院跡東
辺部

一九七七年以前出土の木簡(三)

平城宮跡(第二一次・第二二次北) 薬師寺 下岡田遺跡

中国における簡牘研究の位相

池田 温

庸米付札について

狩野 久

静岡県城山遺跡出土の具注曆木簡について

原 秀三郎

草戸千軒町遺跡出土の木簡——形態を中心に——

志田原重人

彙報

頒価 三五〇〇円 千四〇〇円

大阪・津田トツバナ遺跡

1 所在地 大阪府枚方市津田北町二丁目

2 調査期間 一九八五年(昭60)六月～一九八六年三月

3 発掘機関 枚方市文化財研究調査会

4 調査担当者 桑原武志・片岡 修・西田敏秀・宇治田和生

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 旧石器時代、古墳時代前期～鎌倉時代前半

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

津田トツバナ遺跡は、枚方市の東部、穂谷川の左岸に位置し、生駒山系より連なる丘陵地の裾部に立地する。丘陵上には室町時代の山城、津田城跡があるほか、周辺には旧石器時代から中世の遺跡が点在している。府立高校の建設に伴い発掘調査が行われた結果、旧石器が出土し、古墳時代から鎌倉時代前半までの遺構が検出され、その間、断続的に集落が営まれていること

がわかった。鎌倉時代に属する遺構としては、掘立柱建物・井戸・土壇・焼土壇などがある。木簡は、溝によって囲まれた建物跡群の北東部に隣接する井戸内から出土した。

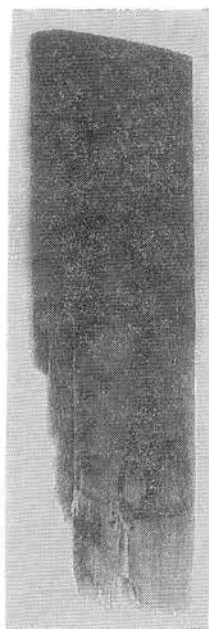
8 木簡の釈文・内容

(1) 「一。屋形山札事 (花押) (穿孔)」

右預方城山国中奈良住人。国東 (176) × (41) × 2 082

木簡の年代は一三世紀代と考えられ、左側が欠損しているが、上部が山形になっており、上・下に孔を穿つ。入会山への入山証か。

「屋形山」は、南東約3kmに鎮座する三ノ宮神社の宮山のことであり、神社は屋形大明神とも呼ばれていた。『当郷旧跡名勝誌』に、嘉吉二年(一四四二)の棟札のことが書かれており、「山城国山子トハ津田村ノ領内屋形山ヲ城卅ノ内、松井村内里村戸津村へ当て作り仕り候故、山子ト申ス(略)」とある。これらの村は、京都府八幡市にあり、それらの村に隣接して奈良の地名も存在しており、本木簡の「奈良」も地名と考えられる。(宇治田和生)



兵庫・^{によろ}衾布^{がもり}ケ森遺跡

- 1 所在地 兵庫県城崎郡日高町衾布
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)六月～九月
- 3 発掘機関 日高町教育委員会
- 4 調査担当者 加賀見省一
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

衾布ケ森遺跡は、但馬国分寺の西南約五〇〇mの段丘上に位置する官衙的性格をもつ遺跡である。県立蘆検定所跡地に町立文化体育



(出 石)

館を建設することになり、日高町教育委員会が事前に発掘調査を行った。調査の結果、西方から続く段丘が調査区の西端付近で終わり、小さな段丘崖を形成している。これより東方にかけては、旧流路による氾濫原になる。氾濫原は、

用地の東方へさらに続き、調査で確認できた幅は四〇mを越える。遺物は、古い段階の流路の堆積土に含まれ、上層からは九世紀中頃から後半の土器・漆紙文書などが出土し、下層からは九世紀初頃の人形など木製模造品が出土している。木簡は、これらの木製模造品と共に出土しており、同時期のものと考えられる。なお、遺構は検出できなかった。

8 木簡の积文・内容

- (1) ×(符籙) 急々如律令

東□

(208)×(24)×5 081

(加賀見省一)

愛知・清洲城下町遺跡(1)

1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町

2 調査期間 一九八六年(昭61)四月～一九八七年三月

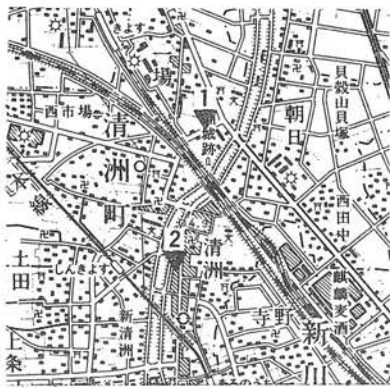
3 発掘機関 財愛知県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 小澤一弘・細野正俊・水谷朋和・中野良法・梅本博志

5 遺跡の種類 城郭・都市跡

6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(名古屋北部)

清洲は、織田信長の居城地として知られているが、中世においても、尾張の守護所が置かれたこの地方の中心都市であり、また、信長以後も、豊臣、徳川政権下の有力大名が次々と入城し、慶長一五年(一六一〇)の名古屋築城に至るまでは全国屈指の城下町を形成していた。この清洲城とその城下町

の調査は、昭和五六年から継続的に実施されているが、遺跡全体が五条川流域の低湿地帯に位置することから、木製品の出土も多く、墨書を有するものも現在までに二〇〇点近くが発見されている。

昭和六一年度は、五カ所の調査区で、合わせて約八〇〇〇㎡の発掘調査を実施したが、このうち、二地点において、木筒類の出土があった。

一 神明町地区（IKJS161B）

名古屋環状二号線建設に伴う事前調査として実施。調査地点は、『清須村古城絵図』によれば、「中堀」と「内堀」を結ぶ南北方向の大溝の位置にあたり、発掘の結果でも、幅四五m、深さ二m余りの「堀」の存在を確認することができた。

板塔婆の出土した溝SD一七は、天正一四年（一五八六）頃と考えられるこの「堀」開鑿時の整地により埋没している。

二 本町地区（IKJH161D）

五条川河川改修に伴う事前調査として実施。この地区は、「外堀」と「中堀」の間にあたり、城下町期では町屋を中心とした地区であり、また、「清須越」以降においては、美濃街道の宿場としての町並みが形成されていた部分である。このうち、今回の調査地点は、宿場の発展に伴い近接する甚目寺村より移転したとされる「久証寺」の旧境内地にあつている。

柿経の出土した土壇SK〇五は、東西七・二m、南北一八m程の

ほぼ長方形の池状の遺構であり、この埋土下層からは、柿経の他に「志野」「織部」をはじめとする多量の陶磁器類、あるいは、箸、漆碗などの木製品が一括出土している。埋土上層は、厚い整地層となつているが、これは、寛永元年（一六二四）のこととされる「久証寺」建立に伴うものである可能性が高い。

8 木筒の積文・内容

一 神明町地区（IKJS161B）

溝SD一七

- (1) ×無妙法蓮華經^{〔為カ〕}□^{〔為カ〕}聡寿幽儀罪障□×……
□不復受 七月×(496+23)×(63)×3 061

板塔婆の断片であり、文言、書体から法華宗系と考えられる。清洲城下町遺跡では、断片を含め、現在までに二八点の板塔婆の出土例があるが、法華宗系と考えられるのは、この一点のみである。枳目材を用い、焼損のため頭部の形状は不明であるが、下端は串状となる。

二 本町地区（IKJH161D）

土壇SK〇五

- (1) □^{〔波カ〕}羅密多無

091

般若心経を書写した柿経の断片。清洲城下町遺跡では、現在まで



清洲城下町の「堀」の復元と木簡の出土地点

●昭和160年度以前 ▼昭和161年度

に、二地点から二四点ほど柿経の出土例があるが、原典が確認されたものは、いずれも法華経であり、それ以外の経典を書写したものは、本例が初めてである。

なお、木簡の積読にあたっては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

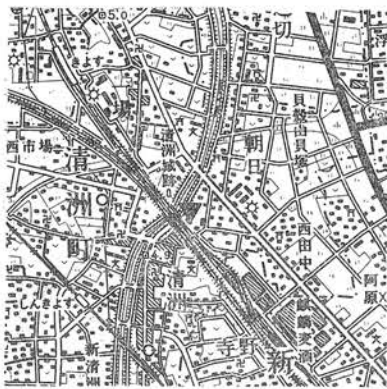
9 関係文献

財愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和六一年度』（一九八七年）

（梅本博志）

愛知・清洲城下町遺跡(2)

- 1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)一月～三月
- 3 発掘機関 清洲町教育委員会
- 4 調査担当者 高橋信明
- 5 遺跡の種類 城郭・都市跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(名古屋北部)

清洲(須)の地名は、一四世紀頃の『神鳳抄』にキヨスとみえるのが最初である。清洲の歴史的重要性が高まったのは、文明八年(一四七六)に尾張守護所が下津城から清洲城へ移されてからである。尾張の中心都市としての機能は、織田信長の入城から、慶長一五年(一六一〇)の名古屋城築城までである。以後、五条川を利用した城下町は解体され、美濃街道の宿場町とな

いしひふしてせ
のあつたう
てまじりとの
つらなう
あんなたやの

ひも一たて
はりありのす
りりし又へもけ
る

(2)

木簡研究 第七号

巻頭言—刀筆の吏—

土田直鎮

一九八四年出土の木簡

- 概要 平城宮・京跡 平城京跡 奈良女子大学構内遺跡 法貴寺遺跡
 - 藤原宮跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 百々遺跡
 - 今里遺跡 平安京左京八条三坊二町 平安京左京九条二坊十三町
 - 水走遺跡 西ノ辻遺跡(1) 西ノ辻遺跡(2) 坪井遺跡 忍ヶ丘駅前遺跡
 - 普賢寺遺跡 大庭北遺跡 輕里遺跡 堺環濠都市遺跡 池田寺遺跡
 - 道場塩田遺跡 新方遺跡 川岸遺跡 倉見遺跡 前東代遺跡
 - 赤堀城跡 朝日西遺跡 清洲城下町遺跡 杏掛城跡 吉田城三ノ丸跡
 - 坂尻遺跡 秋合遺跡 郡遺跡 神明原・元宮川遺跡 北条泰時・時頼邸跡
 - 千葉地遺跡 千葉地東遺跡 藏屋敷遺跡 小敷田遺跡
 - 大津城跡 上永原遺跡 野々宮遺跡 野瀬遺跡 小谷城城下町遺跡
 - 尾上遺跡 北方田中遺跡 永田遺跡 膳棚B遺跡 御前清水遺跡
 - 仙台城三ノ丸跡 市川橋遺跡 多賀城跡 比爪館遺跡 大浦遺跡
 - 弘田柵跡 馬場屋敷遺跡 百間川当麻遺跡 鹿田遺跡 草戸千軒町遺跡
 - 西庄Ⅱ遺跡 井上薬師堂遺跡 荒堅目遺跡
- 一九七七年以前出土の木簡(七)
- 平城宮跡(第三九次)

公式様文書と文書木簡

早川庄八

中国における最近の漢簡研究

大庭 脩

英国出土のローマ木簡

田中 琢

木簡史料紹介—牛札—

石上英一

彙報

頒価 三八〇〇円 千四〇〇円

木簡研究 第四号

卷頭言——木簡保存法の思い出——

坪井清足

一九八一年出土の木簡

概要 平城宮跡 奈良女子大学構内遺跡 法隆寺 藤原宮跡 長
岡京跡 三条西殿跡 鳥羽離宮跡 若江遺跡 佐堂遺跡 大阪城
三の丸(大手口)遺跡 小曾根遺跡 尾張国府跡 下津城跡 坂
尻遺跡 小川城跡 恒川遺跡 三ツ寺Ⅱ遺跡 下野国府跡 多賀
城跡 郡山遺跡 胆沢城跡 道伝遺跡 笹原遺跡 明成寺遺跡
安田遺跡 大森鐘島遺跡 高堂遺跡 漆町遺跡(C地区) 南吉
田葛山遺跡 百間川遺跡群(原尾島遺跡) 草戸千軒町遺跡 道
照遺跡 長門国分寺跡 野田地区遺跡 湯川神社境内遺跡 大宰
府跡(大楠地区) 九州大学(筑紫地区)構内遺跡 長野遺跡
辻田西遺跡

一九七七年以前出土の木簡(四)

平城宮跡(第二二次南・第二七次・第二八次・第二九次)

呪符木簡の系譜

和田 萃

木簡と上代文学——水産物付札をめぐる——

小谷博泰

「漆紙文書」出土概要

佐藤宗諄

彙報

頒価 三五〇〇円 二四〇〇円

千葉・浜野川遺跡 はまのがわ

1 所在地 千葉市南生実町 みなみおひつみ

2 調査期間 一九八五年(昭60)六月～一九八六年三月

3 発掘機関 財千葉県文化財センター

4 調査担当者 伊藤智樹・金丸 誠・山田貴久

5 遺跡の種類 遺物包含地

6 遺跡の年代 縄文時代前期、弥生時代中期、古墳時代後期～中

・近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(千葉)

浜野川遺跡群は、千葉市の南端部に位置し、標高六m前後の海岸平野上の低湿地遺跡である。遺跡の北側は、中世の小弓城跡のある台地と接し、南側は水田地帯を挟んで村田川をのぞんでいる。河川改修と都市計画道路建設事業にともなう発掘調査では、縄文時代前期の貝塚と弥生時代中期の包含層を確認し

た。古代・中世の遺構は検出されず、遺物も、やや渾然一体とした状況で出土した。後者の遺物としては、曲物・漆塗の椀などの破片があげられる。木簡は、調査区東端でそれらの遺物などと共に包含層より出土した。

8 木簡の积文・内容

(1) 〔鬼カ〕
□(符籙)急如律令

(88)×20×2 019

文字はいずれも赤外線テレビにより判読した。木簡の上部に墨痕は認められるが判然としない。通常この種の呪文では「急」の後に「く」の文字のみえることが多いが、本例では認められない様である。

(金丸 誠)



(近江八幡)

滋賀・光相寺遺跡
こうそうじ

1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字西河原

2 調査期間 一九八六年(昭61)四月～十二月

3 発掘機関 中主町教育委員会

4 調査担当者 徳網克己・山田謙吾

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 奈良時代前期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

光相寺遺跡は、野洲郡の中部に位置し、琵琶湖岸より約2km内陸に入った沖積平野に立地する。今回の調査は、中主町の土地区画整理事業に伴う第五次調査として実施したものである。

調査の結果、奈良時代前期の掘立柱建物跡、溝跡、自然河道等を検出した。木簡は、長さ一二m以上、幅二・五m、深さ三〇cmの溝跡から出土した。溝跡は、茶褐色腐植土が堆積してお

り、二点の木簡の他に、斎串、人形、刀形、琴柱、横櫛、抉りの加工を施した桃の果核などや、フイゴの羽口と鉾澤、紡錘車(鉄製)、馬鞍に取り付ける鞍金具(銅製)が出土した。

光相寺遺跡の第三次調査(一九八五年)では、「石辺」、「刀自家」、「祢」、「富」、「稲邑」などの墨書土器が出土しており、今回の調査でも「石辺」が一点出土している。

8 木簡の积文・内容

(1) [買塩卅俵カ]

(33) × (2) × 6 081

(2) [大友部龍]

12 × 12 × 5 032

(1)は、木簡の左側を欠く。(2)は、姓名を表わしたもので一九八五年に出土した西河原森ノ内遺跡の一号木簡にも「大友」の氏名がみられる。

9 関係文献

中主町教育委員会・中主町埋蔵文化財調査会『西河原森ノ内遺跡第一・二次発掘調査概要』(中主町文化財調査報告書第九集、一九八七年)

同『西河原森ノ内遺跡第三次発掘調査報告書』(同第十二集、一九八七年)

(徳網克己)

滋賀・吉地よしじ薬師堂遺跡

1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字吉地字薬師堂

2 調査期間 一九八六年(昭61)四月～二月

3 発掘機関 中主町教育委員会

4 調査担当者 徳網克己・山田謙吾

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 平安時代～室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

吉地薬師堂遺跡は、吉地の集落から西へ約二〇〇mにある南北に広がる中世集落跡である。周辺は、吉地大寺遺跡、光相寺遺跡、光



明寺遺跡が隣接しており、

遺跡密集地帯の一画を成している。一九八一年から実

施されている町施行区画整理事業に伴い調査を行った。

調査の結果、平安時代～室町時代の建物跡、井戸、土

壇、溝跡等を検出したが、鎌倉時代の遺構が主体を占

める。

木簡は、鎌倉時代前半の集落を方形に区画していたと考えられる幅四～五m、深さ〇・五～〇・八mの規模をもつ溝跡の北溝から一点、西溝から四点、南溝から一点の計六点が出土した。伴出遺物は近江型黒色土器椀、土師小皿、羽釜などの土器類の他、箸状木製品、舟形、下駄、曲物などの木製品がある。

8 木簡の釈文・内容

(1) × 面観世音弁 (156) × 22 × 3

(2) × □ 地藏弁 (127) × 27 × 6

(3) × □ 如来 (72) × 26 × 2

(4) × 天王 (120) × 21 × 3

(5) 「南无地藏弁 (130) × 27 × 4

(6) 正近 (62) × 19 × 4

(1)は恐らく「十一面観世音菩薩」であろう。上下端は、故意に切り落とした形跡がみられる。(2)の上端も同様である。(3)は「如来」の上部に墨痕が残存するが、途中で欠損するため、判読できない。

(4)は上下端とも折損する。(5)は圭頭で、下端を欠損する。卒塔婆と



考えられる。(6)の「正近」は、意味不明である。
本遺跡出土の木簡は、呪符木簡に属するものと考えられ、草戸千
軒遺跡等に類例がみられる。
(山田謙吾)

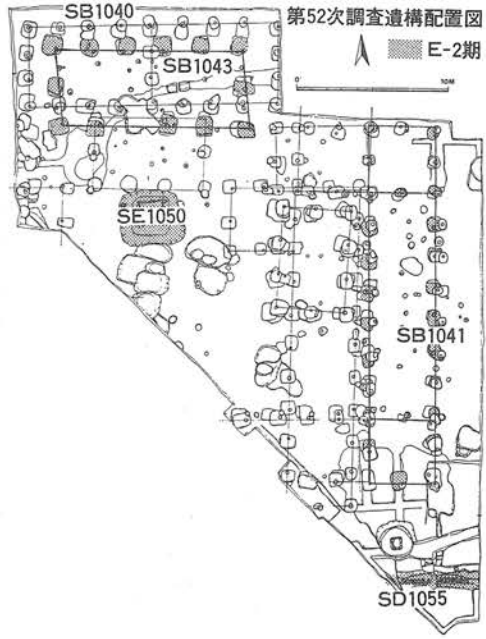
岩手・胆沢城跡

- 1 所在地 岩手県水沢市佐倉河
- 2 調査期間 第五二次調査 一九八六年(昭61)四月～九月
- 3 発掘機関 水沢市教育委員会
- 4 調査担当者 伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一
- 5 遺跡の種類 城柵官衙跡
- 6 遺跡の年代 九世紀初頭～一〇世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(北上)

第五二次調査区は、政庁南東の「東方官衙」と外郭南辺内溝に挟まれる南北約六六mの地区で、外郭南門と政庁を結ぶ線の東六五m前後の位置にあたる。遺構は九世紀初頭から一〇世紀にかかると六期に時期区分され、B期からF期まで、一三小期の建物変遷が確認された。このうち、九世紀末から一〇世紀前半にかかるE期官衙(四小期変遷)については、院を構成する厨屋



と判断された。遺構は、SE一〇五〇井戸を中心に、その北に、SB一〇四三東西棟、東にSB一〇四一南北棟を配するもので、南をSD一〇五五溝が限る。小一・二期では、SB一〇四三東西棟(二×五間)とSB一〇四一A・B南北棟(二×一間)が側柱列を一致させ、各施設が二〇尺方眼(〇・三〇五m≒一尺)のなかにおおよそ配される。つまり、SB一〇四三建物東西中心線上にSE一〇五〇井戸がのり、その東六〇尺にSB一〇四一建物東側柱が位置し、SB一〇四三建物南側柱とSD一〇五五溝が一〇〇尺となる。なお、小三期の段階で、SB一〇四三建物から、梁行三間、桁行八間のS

B一〇四〇A建物に位置を北にずらして改築している。

このSE一〇五〇井戸埋土から、調理・供膳関係の俎・はし・ヘラ状製品・漆器・木碗・皿、燃料の木炭、食料関係のニホンシカ・ニホンイノシシの骨、クルミ・モモの種子、クリの皮、さらに「厨」のほか「右」「左」などの墨書土器を含む多量の土器、定木・題籤軸とともに、四点の木簡が出土した。

なお、「斯波□」の墨書土器も一点あり、胆沢城と斯波地方との結びつきを示している。

8 木簡の積文と内容

- (1) 「和我連□□進白五斗」
155×23×4 051
- (2) 勘書生吉弥候豊本」
(131)×19×8 019
- (3) 「壬カ」(君カ)
×□生□永
(225)×(11)×5 081

9 関係文献

水沢市教育委員会『胆沢城跡昭和六一年度発掘調査概報』(一九八七年)



(2)

(佐久間 賢)

山形・生石^{おishi}2遺跡

- 1 所在地 山形県酒田市大字生石字登路^{とろ}田
- 2 調査期間 二次調査 一九八五年(昭60)七月~九月、三次調査 一九八六年五月~一〇月

- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 安部 実・伊藤邦弘
- 5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代前期、奈良~平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(酒田)

生石2遺跡は、国指定史跡「城輪柵跡」の南東約5kmに位置する。庄内平野の東端、出羽丘陵の山麓にあり、標高一〇〇~一二mを測る。発掘調査は県営ほ場整備事業施工区に限って行った。調査の結果、板材列に囲われた官衙様建物の配置構成を持つ遺構群が、東西に走る溝(SD三〇〇)を挟んで北側と南側

にそれぞれ検出された。北側の板材列の内部から、掘立柱建物一五棟、井戸一基、溝(SD一〇〇)、土壇などが検出されている。

南側の板材列内部から、掘立柱建物六棟、井戸二基、土壇、溝状遺構などが検出されている。墨書土器は、文字の判読不能なものも含めて五二五点出土した。同一墨書銘には「井」(二五七点)、「工」(二二点)などがある。溝SD三〇〇から漆紙文書が一点出土している。

木簡はSD一〇〇の埋土中から出土したもので、他に木材・木製品(弓・曲物・独楽・舟形・鋤・皿など)が多数出土している。

8 木簡の积文・内容



征目材(杉か)で棒状を呈する。上端は鋭利な刃物で垂直に近く断ち切られている。下端は溝中に存在していた段階で乾燥を受けたものか一部分収縮している。なお先端には斜めに入る削り痕が見られる。四面に墨書・墨痕がある。(a)面の墨書は肉眼でも鮮明に読み

取れる。赤外線テレビを使用した観察によれば、(c)面では二文字のほか墨痕が認められ、(b)・(d)面では墨痕だけで文字は不明であった。(a)面については習書と考えられ、他は不明である。溝という性格上、伴出遺物との年代関係はややあいまいになるが、今のところ奈良末と考えたい。

9 関係文献

山形県教育委員会『生石2遺跡発掘調査報告書(2)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第九九集 一九八五年)

同『生石2遺跡発掘調査報告書(3)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第一一七集 一九八六年)

(安部 実)

山形・新青渡遺跡
にいあおど

- 1 所在地 山形県酒田市大字新青渡字家際
- 2 調査期間 一次調査 一九八二年(昭57)八月～九月、二次調査 一九八三年七月～九月

- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 佐藤庄一・安部 実
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



新青渡遺跡は、国指定史跡「城輪柵跡」の北北東四kmに位置する。酒田北部三角洲上に立地する数少ない遺跡の一つである。標高四mを測る。

発掘調査は県営ほ場整備事業施工区に限って行った。遺構は微高地上に集中して検出された。調査の結果、掘立柱建物一七棟、井戸二基、土壇二〇基、製鉄遺構

一基、溝状遺構などが検出されている。墨書土器は文字の判読不能なものも含めて一二五点出土した。同一墨書銘には「祁」(三八点)、「三」(三四点)、「十」(連)「否」(各四点)がある。

木簡は、二次調査のB区北側一二〇mで掘った試掘坑(TP三〇)から一点出土している。伴出遺物はないが、平安時代の遺構面からの出土であるので、同時期の遺物と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 大戸^{〔ロカ〕}西[□]

(178)×21×7.3 081

上下両端が欠損しており、墨書面には刃物による横の刻線が、一〜二cmの間隔で連続して認められる。

9 関係文献

山形県教育委員会『新青渡遺跡第2次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第79集 一九八四年)

(安部 実)



(1)

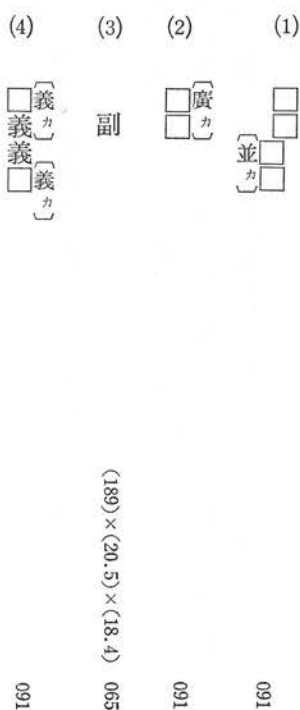
秋田・ほったのさく 弘田柵跡

- 1 所在地 秋田県仙北郡仙北町弘田、千畑町本堂城回
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)四月～九月
- 3 発掘機関 秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所
- 4 調査担当者 船木義勝
- 5 遺跡の種類 城柵官衙跡
- 6 遺跡の年代 平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(六 郷)

弘田柵跡は雄物川の中流域に近い大曲市の東方約6km、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩の真山・長森の丘陵を中心として、北側の烏川・矢島川、南側の丸子川に囲まれた沖積地に立地する。遺跡は長森を中心とする内郭(線)と、長森・真山を含む外郭(線)に囲まれている。内郭線は石塁、築地土塀と角材列が連なり、南・北・東に八脚門がつく。



8 木簡の积文・内容

外郭線は角材列が一行にならび、延長約三・六kmで、東西南北に八脚門がつく。外郭南門、内郭南門延長上の長森丘陵上に政庁がある。政庁は板扉で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これら政庁の建物はI~V期の変遷があり、創建は八世紀末、終末は一一世紀初頭である。

第六五次調査は内郭南門西部を対象とし、第五五次調査と一部重複する。調査の結果、内郭南門の南西隅柱から西へ連なる内郭線(石塁・築地土塀・角材列)を検出した。この内郭線はSX六八七盛土整地地業のうえに構築されている。

木簡はSX六八七盛土整地地業より下層の、SX七二五から、材木、木製品・樹皮などと共に出土した。したがって木簡の埋没時期は、政庁の「第一期直前」期であり、八世紀末の実年代を与えている。

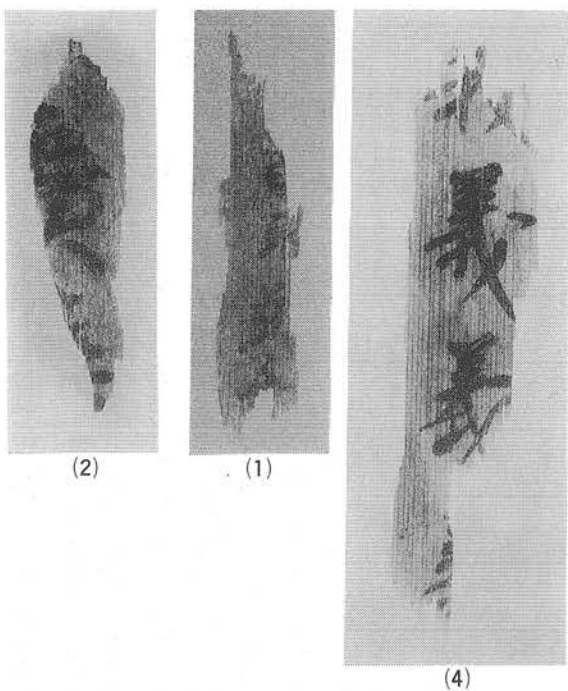
(3)は上部・下部は欠損し、表面・右側面は原形を保つが、裏面から左側面にかけては割れ膚であり、使用後割られたものか、割られたものを再利用したものかは不明である。

积文は国立歴史民俗博物館助教授平川南氏の御教示による。

9 関係文献

秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所『弘田柵跡―第六五〜六七次調査概要―弘田柵跡調査事務所年報一九八六』(一九八七年)

(船木義勝)



木簡研究 第五号

巻頭言——木簡史の研究について——

関 晃

一九八二年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 白

毫寺遺跡 藤原宮跡 山田寺跡 阿部六ノ坪遺跡 長岡京跡(1)

長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 長岡京跡(4) 仁和寺南院跡 大坂城跡

梶子遺跡 道場田遺跡 野畑遺跡 穴太遺跡 下野国府跡 下野

国府跡寄居地区遺跡 長原東遺跡 多賀城跡 弘田柵跡 日野川

朝宮橋下流 桜町遺跡 出合遺跡 辻井遺跡 助三畑遺跡 肩脊

堀の内遺跡 草戸千軒町遺跡 田村遺跡 高畑廃寺 藤田遺跡

一九七七年以前出土の木簡(五)

藤原宮跡

字訓史資料としての平城宮木簡

——古事記の用字法との比較を方法として——

平城宮出土の衛土関係木簡について

小林 芳規

木簡とコンピュータ

鬼頭 清明

書評・『草戸千軒——木簡一——』

田中 琢

彙報

水藤 真

頒価 三五〇〇円 下四〇〇円

福岡・大宰府跡

- 1 所在地 福岡県太宰府市大字観世音寺字不丁・字月山
- 2 調査期間 不丁官衙地区 一九八六年(昭61)一月～三月、月山東官衙地区 一九八六年三月～五月
- 3 発掘機関 九州歴史資料館
- 4 調査担当者 石松好雄
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
一 不丁官衙地区(第九八次調査)



(太宰府)

近年の発掘調査の結果、政庁跡(都府楼跡)の前面地区では、正面の広場的な空間地をはさんで、東側に日吉官衙地区、西側に不丁官衙地区が配され、そこはいわば政庁の張り出し部であったことが判明した。この張り出し部の範囲は東西が

約三八四m、南北が一九六m以上とみられている。

不丁官衙地区では、太宰府市による観世音寺地区土地区画整理事業にともない、昭和五七年度の第八三次調査以来のべ六次にわたり、約五六〇〇㎡について調査を実施してきた。その結果、八世紀代の掘立柱建物二七棟などの遺構とともに、調査区の東端部で南北溝SD二三四〇を検出した。この溝は政庁中軸線から西へ約七二mの地点に位置し、この地区の東限をなす施設と考えられる。出土遺物などからみて、八世紀前半代に開鑿され、八世紀中葉の天平末年ごろに埋没したようである。第九〇次調査までにこの溝から合計一六〇点の木簡が出土したが、そのうちの主要なもの概要については、『木簡研究』第六号および第八号で報告したとおりである。

今回は、住宅建設にともなって、南北を第八四・八五調査区ではさまれた約八五〇㎡について調査を実施した。その結果、掘立柱建物六棟、柵一条、井戸一基、溝二条などの遺構を検出したが、溝の一条がSD二三四〇である。SD二三四〇を約二二mにわたり検出したが、その規模は幅が六m前後、深さが一m前後で、既検出部とほぼ同じであった。一二点の木簡はすべてこの溝中から出土した。

木簡以外の出土遺物は、各種の土器や瓦など一般的なものであるが、土器のなかには漆容器として用いられたものもある。墨書土器には「人足人足」「□司」「酒」など数点がある。「□司」は須恵器の蓋の外面に墨書され、第一字は「匠」字のようでもあり、その場

合は政庁内の匠司の存在とも符合するが、字画的に疑問が残る。ただ、これもSD二三四〇から出土したものであり、第八七次調査の際にこの溝から出土した墨書土器の「政所」とともに、政庁内の所司について考える上で注目されるし、さらには天平年間における所司の成立・存在を傍証するものといえる。

二 月山東官衙地区（第九九次調査）

政庁跡の東側に月山という小丘があり、今回の調査地はその東南に位置している。この地区ではすでに昭和四八年度の第三次調査など四次にわたる調査を行い、東西約一二二m、南北七一mの柵で囲まれた内部から掘立柱建物一〇棟を検出し、月山東官衙地区と称していた。今回の調査では東西柵SA五六〇の東端部や掘立柱建物六棟などを検出したが、これらの建物は八世紀前半から一一世紀にかけてのもので、大きく四期に分けられる。木簡はこの地区の東端に位置する二×三間以上の南北棟総柱建物SB二九二〇の棟通りの柱列の南から二番目の柱穴から一点が出土した。これ以外の出土遺物はごく一般的な各種の土器が中心で、特記すべきものはみられない。

8 木簡の积文・内容

一 不丁官衙地区

今回は一二点の木簡を検出し、以前に出土した分と合せてSD二三四〇からは最終的に一七二点を検出したことになる。



(1)

一二点を形態的に分類すると、〇一一型式、〇三二型式、〇三九型式が各一点、〇八一型式が九点となる。(1)と(7)を除けば、全体的に墨の残存状況が悪い。赤外線テレビを用いて観察しても、部分的にでも積読できたものは五点にすぎず、他の五点は形状的にも損傷が著しい断片であり、いずれもわずかな墨痕がみられる程度であった。

- (1) 「為班給筑前筑後肥等国遣基肆城稻穀随大監正六上田」
中朝 ×
264 × 34 × 6 011

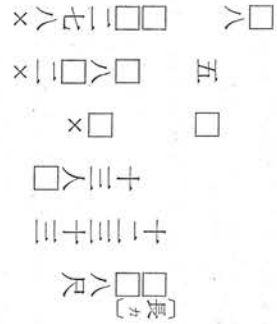
- (2) 「 \bigvee □ 一石五 ×
(65) × 26 × 5 039

- (3) × □ □ 一斗
(116) × 26 × 4 081

- (4) 「 \bigvee 肥後 □ 廿」
214 × 21 × 6 032

- (5) × □ □ 七 □ □ 九 □ □ ×
× □ □ × □ ×
(207) × 24 × 4 081

(6)



(56) × 118 × 6 081

(7)

マ 豊田
 [下カ] 神マ津田良
 [マカ] 廣磨

十人

「乃牟」

(117) × 96 × 4 019

(1)は投棄後に受けたとみられる若干の損傷を除けば、完形品とみなしうる。頂部両端を円く整形し、若干裾窄みに作られている点が特徴的で、一見したところ笏を想起させるが、長さなどに疑問が残る。「朝」字の下端部以下の面が二次的に削り取られているが、いかなる理由によるのかは明らかでない。そこには「臣」字以下の二、三字が存し、それは田中朝臣の名であったと考えられる。位階表記における「位」字の省略はしばしば例がみられるが、国名の「肥」については解しがたい。また「大監」以下を小書し、あくま

でも印象にすぎないが、これと上半部とは異筆のようでもあり、この点についてはさらに検討を要する。

このような基本的な問題のほか、この文をいかに読み下し、いかに解するかという点も問題である。現在までのところ、「筑前・筑後・肥などの国に班給するため基肄城の稲穀を(遣わし)、大監正六(位)上田中朝(臣某)に随わしむ」と読み下しうると考えている。

班給の目的、基肄城の稲穀の性格と班給との関係、田中朝臣の人物比定、大監としての彼の任務など、釈読が容易な反面、多くの問題点を含んでいる。

(2)~(4)は何らかの数量を示し、その原形は付札的なものであったと考えられるが、これ以上の釈読は困難であり、その品名を特定することはできない。とくに(4)の第三字は「国」字のようにもみえるが、その場合は品名が記されていないことになり、すでに報告したものとおわせて、大宰府における木簡のあり方を考える上での重要な素材(資料)の一つとなる。

(5)はほぼ全面にわたって墨痕がみられるが、いずれも断片的である。これ以上の釈読は不能であるが、釈読できた文字が数字であることからすれば、本来的には物品に関係するものとも考えられる。

(6)は横材に用いている。記された文字の大部分は数字であるが、一行目の「尺」、三行目の「人」というように、単位が異なっている。この性格を特定することはできない。(7)は一種の歴名であ

ろう。「^{下カ}神マ」は第八七次調査出土木簡にもみえる『木簡研究』第八号、大宰府跡・不丁地区⑤。両者の関連性を考えるべきであろうが、ともに上半部を欠いていることもあって、「下」字の解釈が容易でない。

以上、第九八次調査出土木簡について簡単に報告した。個々の内容はともかく、基本的な性格は前号などで報告したSD二三四〇出土木簡と共通すると考えられるので、総括は省略する。前述のように、この溝からは一七二点が出土したわけであるが、年紀をもつなど個々の内容もさることながら、大宰府史跡ではこれほどのものがまとまって出土した例はないので、これらは単に新史料というだけでなく、今後の大宰府研究にも資するものといえるだろう。

二月山東官衙地区

(1) X□六□半

(28) × (27) × 2 081

腐蝕が著しく、削屑に近い断片である。具体的な内容などは明らかでないが、何らかの数量を記したもののようであり、本来は付札的なものであった可能性も考えられる。当地区から出土した最初の木簡であり、また柱穴から出土した点でも初めてである。

9 関係文献

九州歴史資料館『大宰府史跡―昭和六一年度発掘調査概報』(一九八七年)
(倉住靖彦)

―長岡京出土墨書土器の概要と考察―

『向日市文化資料館研究紀要』 創刊号

「東土川西遺跡の弥生土器

―乙訓地域における第5様式(庄内式)土器の変遷―

国下多美樹

「長岡京の墨書土器」

清水 みき

B5版 51頁 一九八七年増刷

『向日市文化資料館研究紀要』 第二号

「墨書土器の機能について」

―都城(長岡京)の墨書土器を中心に― 清水 みき

「長岡京廃都以後の土地利用」 山中 章

B5版 48頁 一九八七年発行

△申込先▽ 向日市文化資料館

〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-1

TEL 〇七五-九三一-二八二

頒 価 各五〇〇円
送 料 各二〇〇円

福岡・井相田C遺跡

- 1 所在地 福岡市博多区井相田
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)七月～一九八七年二月
- 3 発掘機関 福岡市教育委員会
- 4 調査担当者 横山邦継・瀧本正志
- 5 遺跡の種類 集落跡・水田跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代後期～平安時代前期、室町時代後期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(福岡)

井相田C遺跡は、福岡平野東部を北流する御笠川中流域西岸に広がる標高一二mの微高地に位置する。『倭名類聚抄』によると、本

遺跡は那珂郡中嶋郷に属していたと考えられ、調査地から南東方向七kmには大宰府政庁跡が所在する。

発掘調査は、中学校建設工事に伴って、井相田C遺跡第二次調査として実施された。その結果、奈良時代後期～平安時代前期の集落

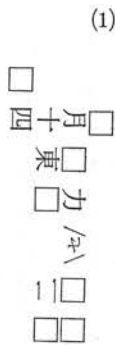
跡と、室町時代後期の水田跡を検出した。集落跡は、掘立柱建物・竪穴式住居・井戸・溝からなり、井戸SE〇二から木簡三点と墨書土器七点が出土した。また、室町時代後期の水田跡は、水田・池・大溝からなり、池SG一六から柿経など約一七〇〇点を数える墨書木札類が出土した。

井戸SE〇二は、直径三mの円形の掘形を持ち、井戸底中央に方形の井戸枠(内法八〇cm×一m)が据え付けられている。井戸枠は、納溝を有する柱に板を横位状に差し込んで作られている。

墨書土器は全て須恵器で、蓋の内面と杯の底部外面とに「徳」「遠賀」「良」の文字が墨書されている。墨書土器は、当調査地に南接する第一次調査においても二八点(内一点は人面墨書土器)出土している。

池SG一六は、東西三三m・南北一八mを測る楕円形を呈している。池の底は、西半部が一段低くなり、三・五mの深さを測る。

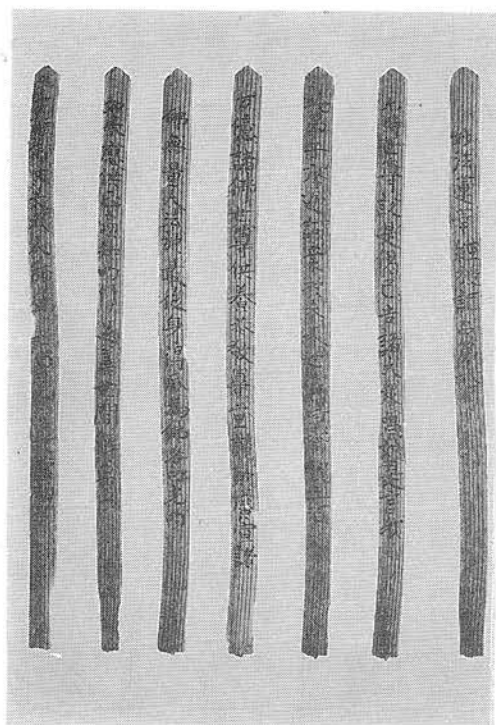
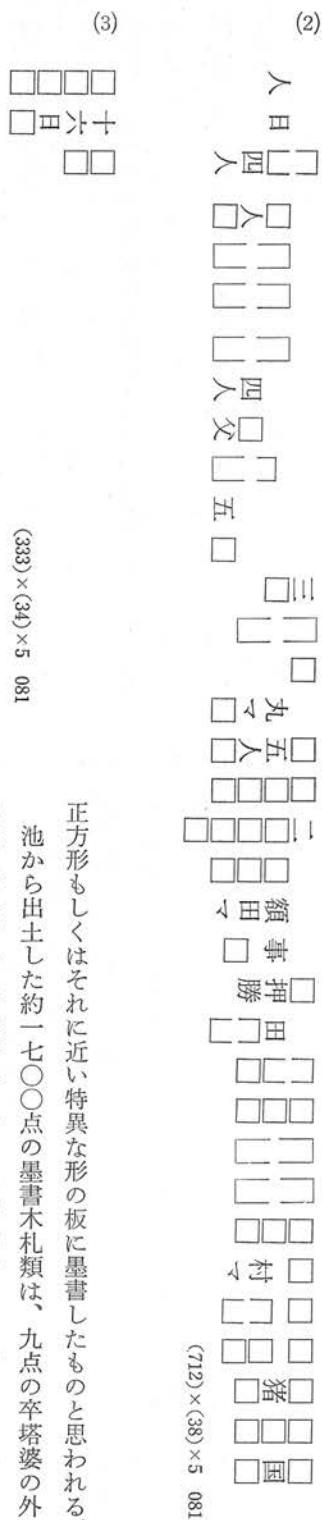
8 木簡の積文・内容



(118)×(28)×(1) 081

木簡(1)は、左右・上下とも欠損し、形状は不明である。残存する部分は上下二つに割れている。墨書は片面のみであるが、文字方向がセ/を境として逆になっている。木簡(2)は、左右・上下とも欠損し、形状は不明である。残存する部分は五つに割れている。墨書は片面に残るが、一部は削られている。文書木簡と考えられ、「丸マ」「額田マ」等の氏名、人名と思われる「押勝」が書かれている。また、「五人」「四人」などの人数が数ヶ所に書かれている点は注目される。木簡(3)は、左右・上下とも欠損し、形状は不明である。墨書は片面の一部に残り他は削られている。

今回出土した木簡は、三点とも文字が板目に直交して書かれている。これは、板の原形は三点とも不明ではあるものの、残存状態から考えると、縦長の板を横にして使用したものと思われる。特に木簡(2)は、横が七一・二cm残存し、さらに上下が割れていることから



卒塔婆

正方形もしくはそれに近い特異な形の板に墨書したものと思われる。池から出土した約一七〇〇点の墨書木札類は、九点の卒塔婆の外は全て柿経である。卒塔婆の多くは五輪塔形をなし、その中央部には木釘が残る。卒塔婆の内二点に「長禄参年」(一四五九)と「寛正

五年」(一四六四)の紀年銘が認められた。

柿経は、頭部を圭頭状にした長さ二七cm、幅一・四cm、二cm、厚さ〇・三mm、一mmの薄板に法華経を分割して写経したものである。法華経以外の経文は認められない。今回出土した柿経は、以前に各地で出土した柿経と同様に、二〇枚を一単位とし、板の両面に経文を墨書した例が多くを占める。また、経文は一七文字、偈文は一六文字をそれぞれ両面に墨書しているが、巻頭・巻末部分では字数の関係からか片面のみに墨書している。柿経に写経した法華経は、巻一の序品第一から巻八の普賢菩薩勸発品第二八までの各品の経文が認められる。

以上のように、一次・二次調査における多くの木簡・墨書土器・製塩土器の出土は、調査で検出した掘立柱建物群の性格が、公的施設であることを強く示すものであろう。

なお、本木簡・墨書木札類の釈読にあたり、九州歴史資料館倉住靖彦、奈良国立文化財研究所加藤優の両氏に御教示いただいた。

9 参考文献

- 福岡市教育委員会『井相田C遺跡第二次調査現地説明会資料』(一九八六年)
- 同『井相田C遺跡I』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第一五二集) 一九八七年

(瀧本正志)

木簡研究 第六号

巻頭言——記紀批判と木簡——

直木孝次郎

一九八三年出土の木簡

- 概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 平城京左京八条三坊十一坪 東大寺仏餉屋下層遺構 藤原宮跡 長岡宮・京跡 平安京右京八条二坊 定山遺跡 水走遺跡 津堂遺跡 高宮遺跡 池上・曾根遺跡 万町北遺跡 山垣遺跡 福成寺遺跡 沢田宮谷遺跡 長尾沖田遺跡 小川城遺跡 道場田遺跡 宮久保遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 東光寺遺跡 北大萱遺跡 篠脇遺跡 北稻付遺跡 鯉沼東Ⅱ遺跡 下野国府跡 多賀城跡 一乗谷朝倉氏遺跡 近岡遺跡 曾根遺跡 前田遺跡 美作国府跡 草戸千軒町遺跡 尾道遺跡 芳原城跡 大宰府跡 一九七七年以前出土の木簡(六)
- 平城宮跡(第三二次)

平安時代の日記にみえる木簡

山田 英雄

日本古代の人口について

鎌田 元一

彙報

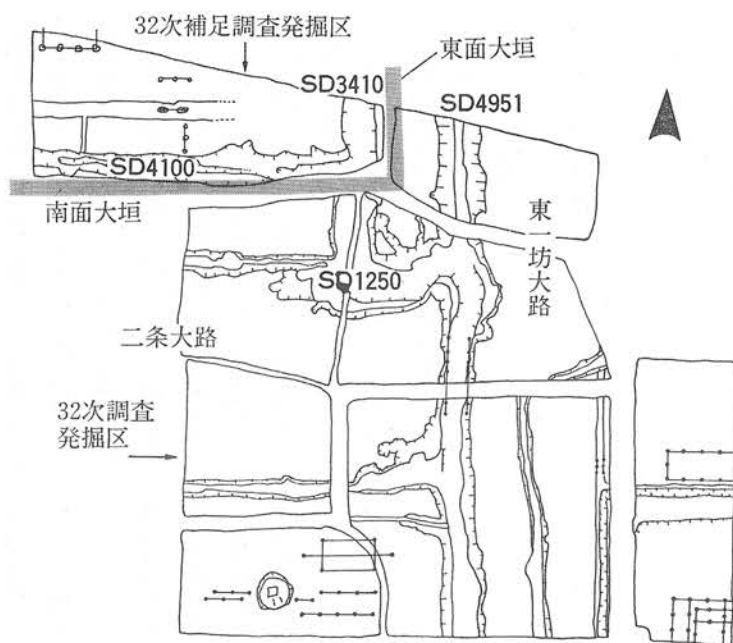
『木簡研究』一〜五号総目次

頒価 三五〇〇円 千四〇〇円

一九七七年以前出土の木簡(九)

奈良・平城宮跡(第三次補足調査)

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 一九六六年(昭41)五月～十二月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 杉山信三
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
 第三次補足調査は、平城宮東南隅で、本誌六号で紹介した第三次調査区の北西に接する場所で実施された。調査面積は一一八二㎡である。検出した主な遺構は、南面大垣と築地一条、建物二棟、柵四条、溝二条、炉四ヶ所などである。
 木簡が出土したのは、南面大垣の北を東へ流れる東西溝SD四一〇〇と、調査区東端で確認された、東面大垣の内側を南流する南北溝SD三四一〇からである。



第32次調査・同補足調査遺構略図

溝SD四一〇〇 SD四一〇〇はA・B二時期に大別できる。S

D四一〇〇Aは、調査区西端では南面大垣の心より北へ5mの位置に溝の心があり、溝幅は一・八mをはかる。ところが、東へいくにしたがって溝幅が南へ拡がり、一部、南面大垣をえぐるようにして破壊している。調査区の東半では、溝の幅は最大6mにおよんでいる。溝の深さは西端で〇・四m、東へ徐々に深くなり、最も深いところでは一・〇mとなる。溝SD四一〇〇Aの堆積土は、上下二層におかれ、上層は暗褐色の砂質粘土であり、下層は灰色の砂である。木簡は合計一二八三七点でいずれも下層から出土した。溝底はかなり凹凸があり、土壌状の窪みが木簡の溜り場となって大量にまつまって出土した。年紀をもつ木簡も一〇〇点近くあり、それらは上限は神亀五年であるが、神護景雲年間に集中し、下限は宝亀元年である。SD四一〇〇Aが整地によって埋めたられ、のちにSD四一〇〇Bがほぼ同じ位置を流れることとなる。SD四一〇〇Bは溝幅一・二m、深さ〇・三五〇・七mの細い溝である。堆積土は礫混りの灰褐色砂質土で、遺物は少なく、木簡もSD四一〇〇Bからは一点も出土していない。

溝SD三四一〇 SD三四一〇は第二次朝堂院の東方約一五〇mに位置し、東院地区の西を南流し、東院張出部以南においては東面大垣の内側を流れて、宮城の南で二条大路北側溝SD一二五〇に合流する基幹排水路である。第三二次補足調査区では幅が6m、深さ

一・五mとなっている。溝の堆積土は上下二層に大別でき、上層は黒色粘土と灰褐色砂質土、下層は灰褐色粗砂と青灰色砂土が堆積している。木簡は上層から五点、下層から六七点出土した。

なお、SD四一〇〇AやSD三四一〇からは、木簡のほかにも、瓦・土器・金属器・木製品・漆紙文書などが出土したが、その中でも墨書土器は注目される。SD四一〇〇Aから「式卅二」と記したものが三点と「式部外曹司進」・「式曹」・「少祐」・「子麻呂子」／麻呂子／子子子／広原田丹比郡／舟丹丹／子泉国□□等各一点、SD三四一〇からも「式卅二」一点が出土している。

8 木簡の釈文・内容

本調査出土木簡の特色は以下のとおりである。

一、SD四一〇〇出土の木簡は削屑が90%以上を占めている。このように削屑が多数含まれていることは、特定の場所で木簡から削りとられた細片が一括して堆積していたものと考えられ、しかも木簡・削屑が溝の同一土層（SD四一〇〇A下層）から滞留した状況で出土したことは、これらの木簡・削屑が一括した、等質の史料としてあつかえることを示唆している。

二、SD四一〇〇出土の木簡の内容はそのほとんどが式部省関係のものと考えられる。なかでも考課関係の木簡が多数出土したことが注目され、八世紀の官僚制の研究史料として貴重なものである。

三、考課木簡は、その形態上の特色として、上端側面から小穴をあけ、紐等で貫綴することができるようになっているものが多くみられた。これは考課関係の木簡の機能を検討する上で重要な手がかりを与えている。

四、木簡の年紀は神亀五年から宝亀元年までをふくむが、神亀年間のものは発掘区のSD四一〇〇の西端においてのみ出土しているので、それ以外はほとんどが天平神護年中から宝亀元年頃までのものとみてよい。

(1) ・「式部省召 書生佐為宿祢諸麻呂

十二月廿□□ (183)×35×3 019

(2) 「大学寮解 申宿直官人事少允從六位上紀朝臣直人

神護景雲四年八月卅日 300×40×1 011 三七五二号

(3) 「大学寮解 申宿直官人事直講正八位上濃宜公水通

天平宝字八年□月十一日九 241×33×3 011 三七五三号

(4) 「河内職解 申宿直× 091

(5) 「諸司移」

(題籤軸)

・「神護景雲三年」 388×26×8 061

(6) ・「諸司解

(題籤軸)

・「諸司移

(48)×29×2 061 三七六四号

(7) ・「史生省掌

神護景雲元年

(題籤軸)

・「史生省掌

神護景雲元年

(65)×30×10 061

(8) ・「国解上日

(題籤軸)

・「国解上日

(54)×24×7 061

(9) ・「无位田辺史廣調カ進統勞錢伍佰文」

撰津国神亀五年九月五日勘錦織

住吉郡秋庭

172×32×3 032

(10) ・「位子山辺君忍熊資錢五百文」

神亀五年九月七日勘瓶原東人

161×20×4 032

(11) ・「益田君倭麻呂統勞錢」

神亀□年□月廿七日五カ

144×15×3 032

(12) 「去上位子從八位上伯祢廣地年卅二河内国安宿郡」

392×30×14 015

- (13) ・「去上 従八位下□□□□^{〔人カ〕}守公麻呂^{〔年五十四〕}河内国志紀郡『上日二百十船稻』
一 292×30×10 015 三七九五号
- (14) 「去出 位子无位日置造尾□□^{〔冊〕}年□四 (319)×(7)×6 015
- (15) 「去不 大初位下□□□□^{〔年五十六〕}右京 (250)×25×6 019 三七九七号
- (16) 去上 留省大初位上秦忌寸祖足□□^{〔年〕} 091
- (17) ・「去上」大初×
・「今上」大初×
一 (72)×26×8 015 三八〇三号
- (18) 「去不 正八位下□□^{〔死〕} 091 三八三三号
- (19) □秦人真田麻呂□□^{〔年カ〕}□□^{〔冊〕}近江国愛智郡人 091 四〇〇七号
- (20) 養宿祢国足□□^{〔年五十八〕}大和国添下郡□□^{〔人カ〕} 091 三七二〇号
- (21) 執当幹了 091
- (22) 訪察精 091
- (23) 勤於記事誓失无□□^{〔隠〕} 091
- (24) □□^{〔匪〕}懈善 091 三九二二号
- (25) □□^{〔降カ〕}為中等 091 三九三三号
- (26) 上日百五十三 091 三九〇五号
- (27) 上日三三 091 三九一一号
- (28) 「諸司叙位案」 265×14×3 051 三七六三号
- (29) 「依遣高麗使廻来天平宝字二年十月廿八日進一階叙」 243×20×4 015 三七六七号
- (30) 「外従初上物部浄人^{〔年冊〕}遠江国敷智郡人^{〔荒玉〕}□□□□^{〔高麗カ〕}遣□□^{〔使〕}叙位」 296×28×3 011
- (31) 護元年正月七日恩勅進一階叙 091 三七六八号
- (32) 今正八上 正八下 091

彙報

第八回総会および研究集会

本簡学会第八回総会と研究集会は、一九八六年二月六、七日の両日にわたって奈良女子大大会館、および文学部において、約二〇名の参加者を得て開催された、会場には平城宮跡、藤原京跡、大阪府柏原市安堂遺跡、大阪市道修町遺跡等出土の木簡が展示され、関心をよんだ。

◇二月六日(土)(午後一時—五時)

第八回総会(議長 虎尾俊哉氏)

最初に平野邦雄副会長の挨拶があり、会員が二一八名になり今後は会員数と会の運営とのバランスが考えられなければならないこと、また委員については改選の時期を迎えていること、雑誌以外の会員へのサービスとして各地での木簡出土遺跡の見学会も企画したいとおもっていることなどが述べられた。つづいて、議長に虎尾俊哉氏を選出して議事にはいった。

会務・編集報告(佐藤宗諄委員)

会員数は、一三名の新入会員を迎えて、二二〇名になったが二

名の退会者があったので現状は二一八名であること、また外国人会員については雑誌代と送料のみで会員扱いとすること、会誌八号の編集経過、会誌代金の据え置き等が報告され、承認された。会計報告(岩本次郎委員)

一九八五年度の会計報告が行なわれ、年度の収支についての説明があり、ひきつづいて関見監事から会計の執行が正当、適切に行なわれている旨報告があつて、異議なく承認された。

ひきつづき、委員、監事の改選が行なわれ、新委員、監事が選出された(一八三頁参照)。

研究集会(司会 早川庄八氏)

木簡と表記史

土器墨書論—地方官衙の事例を巡って

稲岡耕二

原秀三郎

稲岡氏の報告は本誌に掲載することができた。原氏の報告は、土器墨書という用語およびその性格と分類とについての一般論を展開した上で、坂尻遺跡の事例をとりあげて具体的な報告がなされた。

研究集会終了後、 Grill 友楽で懇親会がひらかれた。

◇二月七日(日)(午前九時—午後三時三〇分)

研究集会(司会 佐藤宗諄氏、青木和夫氏)

一九八六年出土の木簡

寺崎保広

長岡京左京二条二坊六町出土の木簡について

清水みき

大阪市東区道修町出土の豊臣時代の木簡について 中尾芳治
一九八六年度平城宮跡出土の木簡 館野和己

寺崎報告は一九八六年に出土した木簡と八四年以前に出土した未報告の木簡を全国的に取り上げその概要を報告したものである。清水報告は、地子の荷札木簡に論点をしばって報告された。

また、中尾報告は、豊臣時代の荷札木簡についての報告で、脇坂など大名の名前が見られることが注目をひいた。

それぞれの報告については、質疑討論が活発に行われ、総括討議で締めくくられた。最後に直木委員から閉会の辞があり、参加者への謝辞が述べられた。

委員会報告

◇一九八六年二月六日(土) 於奈良国立文化財研究所

総会に先立って、会務・編集の状況、総会・研究集会の運営について検討が行なわれた。

◇一九八六年二月六日(土) 於奈良女子大学

総会後新委員・監事によって、一九八七年度の役員を互選した。
◇一九八七年六月十七日(水) 於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八六年度の会計報告、木簡研究九号の編集計画、研究集会の内容の検討、十周年記念事業の計画についてなどが論議された。同日、会計監査もおこなわれた。

◇一九八七年十一月一日(水) 於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、研究集会の内容の検討、八七年度前半の会計報告などが行なわれ、十周年記念事業として記念出版を行なうことが決った。

木簡学会役員

幹事	監事					委員	副会長	会長		
橋本義則	館野和己	綾村宏	田中稔	和田萃	松下正司	早川庄八	鬼頭清明	青木和夫	大庭脩	平野邦雄
	寺崎保広	加藤優	長山泰孝		八木充	原秀三郎	笹山晴生	岩本次郎	田中琢	
	東野治之	栄原永遠男			吉田孝	町田章	佐藤宗諄	狩野久		

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 9 1987

CONTENTS

Forwood	Minoru Tanaka.....	i
Wooden Tablets Excavated in 1986		1
Outline		
Explanatory Notes		
Nara Palace Site, Nara Prefecture; Kofukuji Temple Site, Nara Prefecture; Fujiwara Capital Site, Nara Prefecture; The Temple Site in Wada, Nara Prefecture; Tachibanadera Temple Site, Nara Prefecture; Remains of Magarikawa, Nara Prefecture; Nagaoka Capital Site(1), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site(2), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site(3), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site(4), Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Western 2nd Ward on 3rd Street, Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Western 1st Ward on 5th Street, Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Western 2nd Ward on 8th Street, Kyoto Prefecture; Fushimijo Castle Site, Kyoto Prefecture; Osakajo Castle Site, Osaka Prefecture; Remains of Ando, Osaka Prefecture; Remains of Tsuda-Toppa, Osaka Prefecture; Remains of Kayafuri-A, Osaka Prefecture; Remains of Nyogamori, Hyogo Prefecture; Presumptive Remains of Tajima-Kokufu, Hyogo Prefecture; Remains of Hatsudayakata, Hyogo Prefecture; Remains of Fukudakataoka, Hyogo Prefecture; Kiyosu Castle Site(1), Aichi Prefecture; Kiyosu Castle Site(2), Aichi Prefecture; Remains of		

Igura, Shizuoka Prefecture; Remains of Tsuchihashi, Shizuoka Prefecture; Sunpu Castle Site, Shizuoka Prefecture; Tokyo University Campus Site, Tokyo Prefecture; Remains of Hamanogawa, Chiba Prefecture; Remains of Jinshojibo, Shiga Prefecture; Remains of Jorinji, Shiga Prefecture; Remains of Kosoji, Shiga Prefecture; Remains of Yoshiji-yakushido, Shiga Prefecture; Isawajo Caslte Site, Iwate Prefecture; Nejo Castle Site, Aomori Prefecture; Remains of Oishi 2, Yamagata Prefecture; Remains of Niiado, Yamagata Prefecture; Hotta Fort Site, Akita Prefecture; Remains of Tana, Fukui Prefecture; Remains of Sonbo, Fukui Prefecture; Remains of Tsuji, Toyama Prefecture; Remains of Toda River, Shimane Prefecture; Remains of Kusadosengencho, Hiroshima Prefecture; Remains of Suo-Kokufu, Yamaguchi Prefecture; Remains of Nakashimada, Tokushima Prefecture; Remains of Dazaifu, Fukuoka Prefecture; Remains of Isoda C, Fukuoka Prefecture; Remains of Yoshinogari, Saga Prefecture	
Wooden Tablets Excavated before 1977(9)	114
Nara Palace Site (32nd Add. Excavation)	
The History of the Application of Chinese Character to Japanese Language and Wooden Tablets Recovered from Morinouchi Site	Koji Inaoka..... 119
The Reconstruction of SAKUSHO (冊書) Recovered from Linghusui (凌胡巖) in TUNHUANG (敦煌)	Osamu Oba..... 130
A Collection of Excavated "Urushi-Gami" (Paper Permeated with Japan) Documents	Sojun Sato, Yohinori Hashimoto..... 144
The Function of the Wooden Tablets Stored of SHOSOIN, Concernning to the Reports of Hidesaburo Hara	Haruyuki Tono..... 176
Memoire for the late TOSHIO KISHI, the Former President of MOKKAN GAKKAI.....	Kunio Hirano..... 180

Published by

JAPANESE SOCIETY

FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九八七年十一月二十日 印刷
一九八七年十一月二十五日 発行

〒630 奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所

編集発行

木

簡学

会

鬼頭清明 氣付
会長 平野邦雄

TEL (0480) 三四一三九三一
振替口座 京都 〇一五二七

京都市下京区油小路仏光寺上ル

印刷

眞

陽

社

TEL (05) 三五六一六〇三四

ISSN 0912-2060

